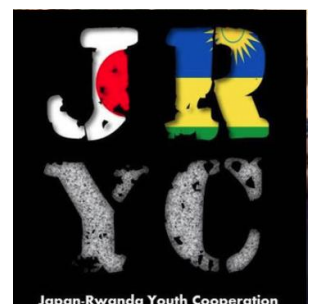


日本ルワンダ学生会議

Japan Rwanda Youth Cooperation

第19回本会議inルワンダ 活動報告書

2022年11月



第1章 日本ルワンダ学生会議

はじめに
代表・副代表挨拶
後援者挨拶
団体概要・沿革
ルワンダ 基本情報

はじめに

この度は「日本ルワンダ学生会議 第19回本会議 事業報告書」を手にとってくださり、ありがとうございます。この報告書を通じて、皆様に今夏の活動を報告できることを大変嬉しく思っております。本書は2022年9月14日から30日までの間、日本人学生5名がルワンダに渡航し、現地でルワンダ大学の学生と共に実施した事業「第19回日本ルワンダ学生会議本会議」の活動内容をまとめたものです。

第19回本会議では、「グローバル化の現状と功罪及びその未来を考える」という全体テーマを掲げ、本会議でのディスカッションをはじめ、テーマに関係する各所を訪問しました。弊団体としては、コロナ禍を経て実に3年ぶりのルワンダ渡航および本会議開催となりました。この3年間でルワンダには変化もみられ、日本人メンバーはそのルワンダの姿に新鮮さを感じながらも、それでもなお変わらない形でルワンダ人学生と交流することができた時間は、非常に有意義なものでした。

さて、日本ではほとんど報道されることはありませんが、近年ルワンダは国際社会から以前にも増して注目を集めています。その理由こそが、グローバル化の潮流に乗った経済発展やテクノロジーなのです。我々も、近年のルワンダの目覚ましい発展については渡航前に勉強を重ね、様々な側面からルワンダについて理解したつもりでいました。しかし実際に渡航してみると、想像以上に随所でグローバル化やルワンダ国家の発展・進歩の影響を実感しました。現地のスーパーマーケットでは海外輸入品が数多く並び、Huye Mountain Coffeeでは品質で世界と戦うルワンダコーヒーの生産現場を見学しました。またルワンダ大学やカーネギーメロン大学アフリカ校では、ルワンダ高等教育の質の向上を実感しました。さらに、キガリおよびムランビ虐殺記念館訪問や社会奉仕活動である「ウムガンダ」参加を通し、ルワンダの人々が過去を教訓に未来へ歩みを進めていることを学びました。そして何より、本会議や日本大使公邸でのディスカッションを通し、ルワンダ人学生が自国の未来について真剣に考える姿に感銘を受け、我々も彼らの姿勢を学ばなければならないと痛感しました。

こうしたかけがえのない学びは、実際にルワンダの地に降り立ち、自分の目で見て肌で感じること、そしてルワンダ人との生の交流を通してこそ得られたものです。日本にはアクセスできない14日間のこの経験を通し、弊団体の活動理念である「相互理解」がなぜ重要であるのか、その答えを各々が発見できたと確信しています。

最後となりましたが、本事業は多くの方々のご協力とご支援なくしては実現することができませんでした。皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

本書が、ルワンダへの理解および異文化への理解の一助となりましたら幸いです。

2022年11月
日本ルワンダ学生会議 メンバー一同

代表挨拶

はじめに、この日本ルワンダ学生会議本会議を開催するにあたり多大なご支援・ご協力をいただきました顧問の小峯先生をはじめ、訪問先のみなさま、OBのみなさまに改めて御礼申し上げます。また、双日国際交流財団様、三菱UFJ国際財団様には多額の活動助成金を支給していただきました。みなさまのご支援・ご協力がなければ、このような実りの多い渡航事業とはならなかったことでしょう。

私がこの日本ルワンダ学生会議のメンバーになったのは、新型コロナウイルスの感染拡大が始まったばかりである2020年のときです。パンデミックの中でも、大好きなアフリカ・ルワンダに関わる活動がしたいという気持ちから入団しました。それから2年、ようやく本会議の開催に至ったのは喜ばしい限りです。

実際にルワンダを訪れ、現状を自分の目で見て、多くのルワンダ人と交流してみて感じたことは「日本には得られない、現地に行ってみなければわからないことがたくさんある」ということです。学生会議に所属している2年間、毎月の勉強会やオンラインイベント、本を通してルワンダに関する知識を深めてきました。しかしながら、現地で見た景色一つ一つが私の目には新鮮に映りました。まず、あらゆる店や交通機関でキャッシュレス決済の利用が可能なことには驚きました。その種類も豊富であることや、友人間で送金をしている様子は日本と何も変わりません。交通機関においては、コロナ禍により導入が遅れているといったニュースを目にしましたが、少なくとも首都キガリにおいてはそのような様子は見られませんでした。中心部には高層ビルが立ち並び、まるで日本にいるかのように錯覚する場面もありました。一方、街中は比較的綺麗でしたが、ごみが捨てられている部分も多々見られました。いわゆるポイ捨てをした場合、厳しく罰せられるのかと思いきや、白い目で見られるだけという話を聞きました。インターネットでは得られないような情報を得られる、ルワンダ人との等身大の理解を進めることができるのは実際に異国に足を運ぶ一番の醍醐味であります。

私たちは主に首都キガリに約2週間程度しか滞在していません。私たちが見て感じたものはルワンダの一面に過ぎないでしょう。しかし、この報告書に記したことが、実際に渡航した私たちが自分の目で見て、話を聞いて感じたこと、考えたことであることは間違いありません。本書が、日本においてはあまり知られていないルワンダへの理解の一助となりましたら幸いです。

日本ルワンダ学生会議は引き続き、「相互理解」の活動理念のもと、日本・ルワンダ両国の理解を進めてまいります。今後とも変わらぬご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

日本ルワンダ学生会議 代表
小日向 麻優（東北大学3年）

副代表挨拶

さわやかな秋晴れの続く今日この頃、空に浮かぶ飛行機を見て旅立った夏の夜を思い出しました。私にとっては二度目となるルワンダへの渡航。コロナで諸外国に行けなかったこともあり、三年ぶりの飛行機と異国への旅に緊張と不安を覚えたことを今でも鮮明に覚えています。私はルワンダへの渡航が二度目でしたが、飛行機から降り立ち街並みを見て初めて見たような感覚に陥りました。それほど、ルワンダの首都であるキガリはこの三年間で発展していました。

ルワンダと聞くと、多くの方が「どこの国？」と聞き返してきます。たとえ知っていても「虐殺があった国」や「アフリカのどこかの国」といったイメージを持っている人が多いのではないのでしょうか。世間のルワンダに対するイメージと、二十一世紀のルワンダの姿には乖離があるように感じます。ルワンダの首都キガリには大きなビルが並び、イタリアンレストランや内装が綺麗なカレー屋さんがあります。カフェではモバイルオーダーができ、M-Pesaやmomo payなどの電子決済も可能です。また経済成長率は年平均約7%で、ICT産業が急激に伸びています。ルワンダの大学生は自国の未来を創っていく自覚と、ルワンダの未来は明るいという自信に満ち溢れています。私はそんなルワンダに、「未来」を感じます。

学生の拙い報告書ではございますが、この報告書が一人でも多くの方のルワンダへの先入観を覆すものになったら幸いです。私たち日本ルワンダ学生会議は、今後も活動を重ね社会に少しずつ変化を起こして参ります。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

日本ルワンダ学生会議 副代表
山崎 優菜（京都外国語大学3年）

後援者挨拶

新型コロナウイルスが発見され、世界に拡大し始めてから3年、この間、世界中が新型コロナウイルスに恐れおののき、人の移動は大きく制限される世の中となりました。

国際交流の活動も同じように大きく制約を受けるようになりました。とりわけ学生主体の交流団体等は、卒業・就職によってメンバーの入れ替わりが激しいという特徴があります。しかし活動が十分に行えないことから、自分たちの活動の魅力や、必要な業務の経験を後輩たちに託せない団体も数多くありました。そのような団体の中には活動が低迷、交流先とのつながりの希薄化、あるいは団体そのものが消滅してしまうところもありました。

そのような中でも、日本ルワンダ学生会議（JRYC）は、ルワンダの学生との対面での交流ができない時間が長く続いたにもかかわらず、オンライン技術などを駆使しながら何とか活動をつなぎとめていきました。コロナ禍でもあきらめず、活動を続けていったこと自体には敬意を表したいと思います。

ルワンダはこの15年で大きく変貌してきました。それは「アフリカの奇跡」として多くの方々に知られています。そのような現在のルワンダの学生たちとの今回の本会議のテーマは、グローバル化とその功罪でした。とりわけルワンダの学生たちが、グローバル化について、経済成長や投資の拡大といったポジティブな側面と同時に、海外文化がアフリカに大量に流入してくることや、経済や社会が統合されていくことについて新たな植民地化なのではないかという疑問を呈していたことは興味深い。

このような疑問—あるいは恐れ—を共有した日本人学生は、あらためてグローバル化について考える視座を得たことだろう。

次回の本会議では、グローバル化が進んだ結果、日本がどうなったかをルワンダの学生に実際に日本に来てもらい、日本人学生とともに知ってもらう機会とできれば素晴らしいと思います。

以上

小峯茂嗣
アフリカ平和再建委員会（ARC）事務局長
桃山学院大学国際センター講師

団体概要・沿革

・日本ルワンダ学生会議（通称：J R Y C、英語表記：Japan-Rwanda Youth Cooperation）

設立：2008年5月

代表 小日向麻優（東北大学3年）

副代表 山崎優菜（京都外国語大学3年）

・活動理念・目的

私たちの活動理念は「相互理解」を深めることです。普段、日本でルワンダの表面的な政治・経済状況を知ることはできても、その実情、実態を学ぶことは出来ません。当然、ルワンダ人学生の価値観を想像することも不可能です。そこで、招致・渡航事業で直接対話することにより相互理解を深めつつ、相手国の実情を学ぶことを活動目的としています。「相互理解」とはありきたりな言葉ですが、その欠如により、ルワンダでは隣人が隣人を殺す悲惨なジェノサイドが勃発し、他の国でも差別や偏見に起因する紛争が起きています。私たちの活動は小規模ですが、地道な活動を継続することにより世界平和に貢献します。

・団体の沿革

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが「平和学習」をテーマとしたルワンダ渡航プログラムを主催したのが、学生交流の始まりです。当初は、ボランティアセンターが企画・主催していましたが、2008年からは学生が主体となって学生会議活動の運営を行うようになりました。以来、開催場所を日本・ルワンダと交互に変えながら、今年まで通算19回の本会議を実施してきました。次回は、2023年8月にルワンダ人大学生を招聘し、東京と大阪にて第20回本会議を実施する予定です。

・主な活動内容

①**勉強会**：月に1回、オンライン上で行っています。ルワンダに関する文献をゼミ形式で発表したり、アフリカの歴史ドキュメンタリーを鑑賞したりしています。

②**本会議（招致事業・渡航事業）の企画準備・実施**：本会議では、プレゼン発表やフィールドワーク、文化交流イベントなどを通じて、両国の参加者が互いの社会や文化への理解を深めます。準備過程では、複数の財団法人様や基金様に活動資金の助成を申請します。

③**活動報告会や出張授業の実施**：本会議の活動報告会に加え、高校や大学での出張授業も随時実施しています。また、SNSを活用しアフリカやルワンダに対する日本の一般学生や市民の理解を促進しています。

④**外部の講演会やイベントに参加**：外部の機関や団体が開催するアフリカ関連の講演会やイベントに参加、出展し、最新ニュースの把握や他団体との情報共有に努めています。

・過年度の本会議（招致・渡航事業）実施状況

年月	事業	開催地	招致人数	渡航人数
2008年9月	第1回本会議	ルワンダ		8
2009年9月	第2回本会議	ルワンダ		8
2009年12月	第3回本会議	東京、京都、広島、鳥取	5	
2010年8月	第4回本会議	ルワンダ		6
2010年12月	第5回本会議	東京、大阪、名古屋、広島	5	
2011年8月	第6回本会議	ルワンダ		9
2011年12月	第7回本会議	東京、大阪、長崎	5	
2012年8月	第8回本会議	東京、横浜、栃木、岩手	4	
2013年2月	第9回本会議	ルワンダ		4
2013年12月	第10回本会議	東京、横浜、鎌倉、福島	4	
2014年8月	第11回本会議	ルワンダ		5
2015年1月	第12回本会議	東京、京都、佐賀	5	
2015年8月	第13回本会議	東京、大阪、広島、岡山	4	
2016年2月	第14回本会議	ルワンダ		6
2016年8月	第15回本会議	東京、群馬	4	
2017年8月	第16回本会議	ルワンダ		8
2018年8月	第17回本会議	東京	4	
2019年9月	第18回本会議	ルワンダ		10
2022年9月	第19回本会議	ルワンダ		5
		合計	40	69



ルワンダ 基本情報

- ・首都：キガリ
- ・人口：約1,220万人（2017年、世界銀行）
- ・面積：2.63万km²
- ・言語：ルワンダ語、英語、フランス語、スワヒリ語
- ・宗教：キリスト教（主にカトリック）、イスラーム
- ・民族：フツ、ツチ、トゥワ

地理

ルワンダはアフリカ大陸の中央部に位置する内陸国で、南北東西をそれぞれブルンジ、ウガンダ、タンザニア、コンゴ民主共和国と接している。面積は四国の1.5倍ほどの小さな国だが、国土のほぼ全域が丘陵地なので、「千の丘の国（Land of a Thousand Hills）」と呼ばれている。また、アフリカ大地溝帯の西リフト・バレーの上に位置しているため、地殻変動によって生じたキブ湖やルジジ川溪谷、ヴィルンガ山地の火山群を有している。

気候は全土が温帯に属している。標高1500m程度のキブ湖岸地域の年間平均気温は22.8℃である。赤道に近いため春夏秋冬はないが、3月中旬～5月中旬に大雨季、5月中旬～10月中旬に大乾季、10月中旬～12月中旬に小雨季、12月中旬～3月中旬に小乾季がある。

略史

年	出来事
15世紀頃	ルワンダ王国成立
1890年	ドイツ保護領となる
1922年	第一次世界大戦の結果、ベルギーの信託統治領となる
1961年	王政廃止、共和制樹立
1962年	ベルギーから独立
1973年	軍事クーデター、ハビヤリマナ少将が大統領就任
1990年10月	ルワンダ内戦勃発（～94年7月）
1994年4月	内戦中に大虐殺（ジェノサイド）発生、約80万人が犠牲になる
1994年7月	ルワンダ愛国戦線（RPF）が全土を完全制圧、内戦終結
2000年4月	カガメが大統領に就任（3度の大統領選挙に勝利し、現在も大統領）
2007年7月	東アフリカ共同体（EAC）に加盟

政治

- ・政体：共和制
- ・元首：ポール・カガメ大統領（H.E. Mr. Paul KAGAME）
- ・内政

宗主国ベルギーの分割統治により、1962年の独立以前からフツ人とツチ人の中で確執が生じていた。独立後は多数派のフツ人が政権を掌握し、ツチ人を迫害する事件が度々発生するようになった。90年にツチ人主体の反政府軍が反乱を起こし内戦が勃発した。特に、94年4月からはツチ人に対する組織的大虐殺が起き、終戦までの3ヶ月間に80～100万人が犠牲となったと言われている。同年7月に内戦が終結し、新政権が発足。出身部族を示す身分証明書の廃止、遺産相続制度改革、国民和解委員会の設置など、国民融和・和解のための努力をこれまで行ってきた。

03年から大統領選挙で3回連続当選しているカガメ大統領は汚職対策や女性の活躍推進に力を入れており、女性が国会議員に占める割合は61.3%となっている。経済政策の点では、農業や産業、教育など各分野で生産性を高めるICT（情報通信技術）を成長戦略の要と位置づけている。ビジネス環境の整備も進めており、世銀が投資環境の良さを格付けした「Doing Business 2019」で、ルワンダは190カ国・地域中29位となった。

- ・二国関係

現職のカガメ大統領は過去6度訪日している。2019年には第7回アフリカ開発会議（TICAD7）の準備と参加のために2度来日し安倍首相と首脳会談を持つなど、関係は非常に良好である。インフラ面での中国資本の投下が著しいルワンダではあるが、カガメ大統領は人材育成を重視する日本の支援も高く評価している。

経済

- ・主要産業：農業（コーヒー、茶など）
- ・GDP：91.37億ドル（2017年、世界銀行）
- ・経済成長率：6.1%（2017年、世界銀行）
- ・状況

28年前の内戦、虐殺からの復興は既に終わっているが、経済規模や産業の成熟度の点では後進国の域を出ていない。政府は内陸国という地理的に不利な条件を埋め合わせるべく、ICT立国をスローガンに掲げており自国産業の育成と外資の取り込みに注力しているが、未だ発展途上。農業と公務員以外の仕事が少なく、大学生などの超エリート層でも卒業後に就職難に直面する現状がある。日本企業は現在20社程が進出しているが、個人営業の小規模ビジネスがほとんどで大企業はない。ただ、トヨタ製の中古車は数多く輸入されており、同国の自動車シェアの8割超を日本車が占めていると推定されている。

（以上、外務省ホームページより一部引用、加筆）

第2章 第19回本会議 事業概要

開催主旨
スケジュール
参加者名簿
本会議概要

開催趣旨

テーマ：「グローバル化の現状と功罪及びその未来を考える」

近年、技術革新や経済発展により、いわゆる「グローバル化」が急速に進みつつあるが、ルワンダ及び日本においてもその影響は20世紀後半から確実に大きくなってきている。ルワンダは1994年のジェノサイド以降、「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどの急速な経済成長を遂げたが、この復興の背景には、経済や国家政策などの面で中国の影響を無視することはできない。また2022年2月より始まったロシアのウクライナ侵攻により、NATOをはじめとする軍事同盟の構造変化や、日本を含む世界中で物価高騰が発生していることは、グローバル化が進んだ結果生じた状況であるといえるだろう。

では、ルワンダ及び日本におけるグローバル化の現状はどうだろうか。ルワンダは高い経済成長率のもと、海外市場での競争力を高めるため、輸出向けのコーヒー豆の品質向上を目指す設備投資を政府主導で行ったり、先進技術を活用した高付加価値農作物の物流改革に取り組んだりしている。さらに、世界経済フォーラムが2015年に発表した「ICTの活用促進に最も成功した政府」では第1位に選ばれるなど、ICT人材を育成する「ICT立国」として世界的な存在感を高めており、まさにヒトとモノがグローバルに移動しているといえる。

一方日本は、戦後の高度経済成長を経て、長年優れた技術インフラを基盤とした労働生産性を世界に誇ってきた。しかし近年、そうした労働生産性の限界が問題視されているうえ、加速する少子高齢化がそこに拍車をかけ、今後世界的な影響力や存在感が減退していくことが懸念されているのが現実である。

グローバル化は、政治面や経済面のみならず、様々な面で今後も進展していくことが想定されるうえ、影響を及ぼす範囲もさらに拡大していくと考えられる。またその過程は一国のみで進行するものではなく、国際社会が足並みをそろえることが重要である。このような未来が予想される中、グローバル化において対極の立場にあるルワンダと日本双方の見解を共有することは、非常に有益であると考えられる。

したがって我々はこの14日間を通し、グローバル化の現状及びそのメリットやデメリットは何か、また今後も進展すると考えられるグローバル化において懸念すべき点は何かについてルワンダ側メンバーと共に考えていく。

具体的には、ルワンダにおいてグローバル化の進展を体感することができる各所を訪問することで、グローバル化のダイナミズムを学ぶ。そして本会議では、グローバル化についてルワンダ側および日本側メンバーが持つ異なった視座を共有することで、理解を深めていく。

グローバル化を学ぶには、①人的な国際移動、また②グローバル経済の影響を体感することが最も効果的であると考えられる。以下に、①及び②についての詳細を記す。

① グローバルな人的移動を考える

人々の国際的な移動は、コロナウイルスの流行が発生して以来自粛されてきたが、ウィズコロナの時代へと移行しつつある今、再び人の国際移動が活発になる日はそう遠くないと考えられる。人の国際移動は、国際的な経済の活性化などといった利点がある一方、移民問題や難民問題など、考慮しなければならない点が存在することも事実である。

今回の本会議・各所訪問では、上記の問題について両国の現状を共有すると同時に、今後人の国際移動において特に注目すべき問題点について考える。

(ムスリムクォーター、Second Life Strage)

② グローバル経済の影響を体感する

日本とルワンダは、ともに戦争や虐殺といった犠牲を経験したのち、急速な経済成長を遂げたという共通点がある。そして現在では、両国はともに国際的な経済網に組み込まれているといえる。一方で、あまりにもグローバル経済に軸足を置いてしまうと、時に悪影響が生じてしまうとも考えられる。それは、世界各地で起こっている貧富の差の拡大や、現在も進行する物価の高騰を鑑みてもいえることだろう。こうしたグローバル経済の影響を、各所訪問により実際に体感することで世界的な経済の結びつきを学びたい。そして本会議では、今後グローバル経済の中で生じてくると考えられる問題点やその解決策について意見を交換し、類似した経済発展を遂げた両国だからこそできる議論を交わしたい。

(キミロンマーケット、キガリシティセンター、コーヒー農園、JICAプロジェクト現場)

スケジュール

	午前	午後
9/14	渡航準備会議	22:30 成田国際空港 (NRT) ー 4:30 ドーハハマド国際空港(DOH)
9/15	乗り継ぎ (カタール観光)	乗り継ぎ (カタール観光)
9/16	01:45 ドーハハマド国際空港 (DOH) ー 06:55 キガリ国際空港 (KGL)	キガリ虐殺記念館訪問 ルワンダサイドによる歓迎会
9/17	キミロンコ・マーケット訪問	ムスリム人地区・モスク訪問
9/18	(バス移動：キガリ→ファイエ)	ムランビ虐殺記念館訪問 本会議実施 @ルワンダ大学ファイエキャンパス
9/19	ファイエ・コーヒーマウンテン訪問	ルワンダ大学キャンパスツアー (バス移動：ファイエ→キガリ)
9/20	休息	14:00 日本大使公邸訪問
9/21	前半の反省会	13:30 JICAルワンダ事務所訪問
9/22	後半のためのミーティング	15:00 カーネギーメロン大学訪問 OBと対談
9/23	イネマ・アート・ギャラリー訪問	キガリ市内視察
9/24	ウムガンダ (コミュニティー活動) 参加	日本食レストラン (JAPANDA) 訪問 メンタルヘルス向上のサークル発表参加
9/25	教会訪問	文化交流会 フェアウェル・パーティー
9/26	アカゲラ国立公園訪問	アカゲラ国立公園訪問
9/27	キガリ市内の小学校訪問	帰国準備
9/28	カント・ミュージアム訪問	23:25 キガリ国際空港 ー 06:20 ドーハ国際空港
9/29	乗り継ぎ：ミーティング	乗り継ぎ：休息
9/30	01:55 ドーハハマド空港 (DOH) ー 18:35 成田国際空港 (NRT)	

2022年度本会議 参加者名簿

日本側参加者

小日向 麻優	東北大学3年	代表
山崎 優菜	京都外国語大学3年	副代表
吉野 匠人	東京大学大学院1年	国内渉外
沼口 蓮	桜美林大学4年	会計
内 凜太郎	京都大学4年	国際渉外

ルワンダ側参加者

Jean Eric Niyitanga	University of Rwanda	代表
Alia Teto	University of Rwanda	会計
Issa Nsabimana	University of Rwanda	広報 リーダー
Joys Cyiza	University of Rwanda	広報 副リーダー
Pierre Clever Rusingizandekwe	University of Rwanda	副代表
Emmanuel Tuyizere	University of Rwanda	メンバー
Francoise Sugi Wihogora	University of Rwanda	
Francois Regis Hakizimna	University of Rwanda	
Ange Divine Ikuzwe	University of Rwanda	
Alli Cyubahiro	University of Rwanda	
Emmanuel Tuyitake	University of Rwanda	
Didier Dieudonne Byiringiro	University of Rwanda	
Donatien Uwayezu	University of Rwanda	
Oreste Tuyishimire	University of Rwanda	
Consolatrice Byiringiro	University of Rwanda	
Fred Ngabo	University of Rwanda	
Gloriose Uwamahoro	University of Rwanda	
Deogratia Byiringiro	University of Rwanda	
Fina Joyce Uwiduhaye	University of Rwanda	

本会議 概要

About Plenary Session

実施日

2022年9月18日

開催場所

ルワンダ国立大学フイエキャンパス

活動内容

日本・ルワンダ両国の学生が、それぞれ全体テーマ（後述）に沿った分野で興味・関心のあるトピックを決めてプレゼンテーションを行い、全員のプレゼンテーション終了後に全体テーマや各トピックに関連したディスカッションおよび意見交換をする。

活動目的

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、様々なトピックについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

活動成果

1. 互いの国における現状や未来に対する深い理解と学び
2. 異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観や考え方との出会い
3. 日本およびルワンダの将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論



全体テーマ

「グローバル化の現状と功罪及びその未来を考える」

近年、技術革新や経済発展により、いわゆる「グローバル化」が急速に進みつつあるが、ルワンダ及び日本においてもその影響は20世紀後半から確実に大きくなってきている。ルワンダは1994年のジェノサイド以降、「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどの急速な経済成長を遂げたが、この復興の背景には、経済や国家政策などの面で中国の影響を無視することはできない。また2022年2月より始まったロシアのウクライナ侵攻により、NATOをはじめとする軍事同盟の構造変化や、日本を含む世界中で物価高騰が発生していることは、グローバル化が進んだ結果生じた状況であるといえるだろう。

では、ルワンダ及び日本におけるグローバル化の現状はどうだろうか。ルワンダは高い経済成長率のもと、海外市場での競争力を高めるため、輸出向けのコーヒー豆の品質向上を目指す設備投資を政府主導で行ったり、先進技術を活用した高付加価値農作物の物流改革に取り組んだりしている。さらに、世界経済フォーラムが2015年に発表した「ICTの活用促進に最も成功した政府」では第1位に選ばれるなど、ICT人材を育成する「ICT立国」として世界的な存在感を高めており、まさにヒトとモノがグローバルに移動しているといえる。

一方日本は、戦後の高度経済成長を経て、長年優れた技術インフラを基盤とした労働生産性を世界に誇ってきた。しかし近年、そうした労働生産性の限界が問題視されているうえ、加速する少子高齢化がそこに拍車をかけ、今後世界的な影響力や存在感が減退していくことが懸念されているのが現実である。

グローバル化は、政治面や経済面のみならず、様々な面で今後も進展していくことが想定されるうえ、影響を及ぼす範囲もさらに拡大していくと考えられる。またその過程は一国のみで進行するものではなく、国際社会が足並みをそろえることが重要である。このような未来が予想される中、グローバル化において対極の立場にあるとも捉えられるルワンダと日本双方の見解を共有することは、非常に有益であると考えられる。

したがって我々はこの17日間を通し、グローバル化の現状及びそのメリットやデメリットは何か、また今後も進展すると考えられるグローバル化において懸念すべき点は何かについてルワンダ側メンバーと共に考えていく。

具体的には、ルワンダにおいてグローバル化の進展を体感することができる各所を訪問することで、グローバル化のダイナミズムを学ぶ。そして本会議では、グローバル化についてルワンダ側および日本側メンバーが持つ異なった視座を共有することで、理解を深めていく。

Theme

“Reflecting the situation, advantages and disadvantages of globalization and finding out the future”

Thanks to technological and economic developments, globalization is recently expanding rapidly in the world including Rwanda and Japan. Rwandan rapid economic growth known for “miracle of Africa” after genocide in 1994 is partly supported by the influence of China on Rwandan economy and policy. Moreover, Russian invasion since February 2022 has caused changes such as the structure of military alliances like NATO and a huge, worldwide jump in prices. These are also the results due to globalization.

Then, how is globalization spreading in Rwanda and Japan? Making a remarkable economic growth rate, the Rwandan government is progressing capital investment to improve the quality of coffee beans for export and reform on distribution of added value crops with the latest technology, which enhances competitive power in the global market. Rwanda is making its presence in the ICT field, selected as the most successful government in ICT promotion according to the global information technology report 2015 by WEF. Considering those, globalization is widely spreading in Rwanda.

On the other hand, Japan also made a huge economic development after WWII and boasted high productivity by the technology in the world. Nevertheless, due to the limit of the productivity and aging society, unfortunately Japan would lose its presence and influence in the global market.

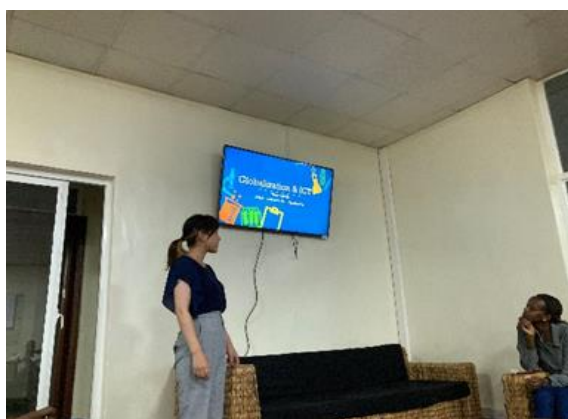
In the world, globalization continues to expand in various fields adding to economic and political ones. It requires worldwide cooperation. That means sharing Japanese and Rwandan perspectives toward globalization through the JRYC conference is highly instructive.

Therefore, we share the current situation, merits and demerits of globalization and then discuss the future vision of globalization and international society with Rwandan members in 17 days. To achieve this, we visit places involved in globalization and have discussion days.

日本側プレゼンテーション要旨（発表順）

1. 小日向麻優 「ICTとグローバリゼーション」

グローバル化によりICT人材が自国をこえて移動することで、技術の交流につながる。先進国・途上国問わず、こうした技術交流は両国のさらなる発展を引き起こすことができるだろう。特に日本とアフリカのこうした取組みとしては、ABE initiativeや、神戸市のスタートアップアフリカをはじめとする様々なプログラムが挙げられる。発明された技術の恩恵を世界中の人々が享受するためには、こうした取組みがさらに拡大することが求められる。



2. 吉野匠人 「グローバル化する日本文化」

日本文化である食や楽器、伝統芸能などは世界各国で親しまれるようになっている。グローバル化にともない日本人が世界中をより活発に移動するようになり、今後さらに日本文化が世界に広まる可能性がある。日本政府は海外に居住する邦人が日本文化を普及することを後押ししている。



3. 沼口蓮 「日本における宗教のグローバル化」

日本において宗教は、思考する前から拒否反応を示されることが多い。それは、アメリカによる戦後教育の結果と凶悪な事件が特定の社会集団を発端に頻発したことが一因であることは否めない。しかし今日のグローバル化により、宗教を学ぶということはより大きな意味を持つようになった。今後は、宗教という言葉をしっかりを使い分け、世界のスタンダードに追いつくことが求められている。



4. 内凜太郎 「在日アフリカ人とグローバリゼーション」

グローバリゼーションの進展により、ここ30年ほどで在日アフリカ人の数は3倍ほどになっている。中には日本で同郷の組織を設立したり、ビジネスを立ち上げたりして、言語や文化が異なる日本での生活を営んでいる人々もいる。しかしそれは、わずか84人しかいない在日ルワンダ人をはじめ、同郷の人々の数が少ない場合には困難である。グローバリゼーションがさらに進展していくと考えられる今後、日本は国を挙げて、彼らのように日本での生活に困難を抱えている可能性のある在日アフリカ人のサポートを行っていく必要があるのではないだろうか。



5. 山崎優菜 「ビジネスのグローバル化とソーシャル化」

現在ビジネスのグローバル化が進んでおり、日系企業のアフリカ進出が増えている。さらに日本ではソーシャルビジネスとして、発展途上国の社会課題を解決するために会社を立ち上げる人が増えている。岸田首相もTICAD8で、日系の社会的企業のアフリカ進出をサポートするという発言をしたように、アフリカを新たな市場として着目するとともに、ビジネスでアフリカの社会問題を解決しようとする動きがある。さらに中国も、一帯一路政策の一環としてアフリカに多額の投資を行なっている。今後アフリカは経済発展を迎える新たな市場として、世界から注目されるだろう。



ルワンダ側プレゼンテーション要旨（発表順）

1. Jean Eric Niyitanga “Globalization introduction and Health Perspective”

グローバリゼーションにより、経済や社会が統合される傾向が強まっている。グローバリゼーションの原動力は2つある。それは、輸送と通信の技術である。人や物が国境を越えて無限に行き来することが可能になったうえ、インターネットをはじめとする情報技術の登場により、国境を越えて瞬時に情報が共有されるようになった。

一方、ここには疑問が残っている。グローバリゼーションは変化をもたらすポジティブな力なのか、それとも新しい形の植民地化なのか？発展途上国は先進国と同じようにグローバリゼーションの恩恵を受けているのか？グローバル化の中で、経済格差はどのように扱われているのか？、という問題である。コロナへの迅速な対応や大規模なワクチン接種によりルワンダは世界的に注目を浴びたが、グローバリゼーションの恩恵を受けるためには、現地のインフラへの投資などによりさらに競争力を高める必要がある。



2. Emmanuel Tuyizere “Globalization Currently”

グローバリゼーションにおける政治的なメリットとしては、国際問題の解決に世界的に取り組めるほか、国際関係の強化などが挙げられる。一方デメリットは、新たな政治体制の構築や、貧富の差の拡大が挙げられる。また経済的なメリットとしては、経済成長や国境を超えた投資などが挙げられるが、その反面ローカルエコノミーの衰退や安価な労働市場による搾取などの問題が起こる危険性がある。



3. Froançois Regis Hakizimana

“Current State Globalization in Rwanda ~Sports and Culture Changes~”

グローバリゼーションはスポーツにも影響を与える。メディアによる国際放送や全世界からの選手の獲得、さらに世界的企業による特定の選手への支援など、スポーツ界においても国際的なネットワークは形成されているのである。

また、文化の変容もグローバリゼーションと密接にかかわっている。例えば、メディアの発達による海外文化がアフリカに流入してくることで、若年層が伝統とは異なる文化やルーティーンを受容するようになっている。その点では、グローバル化は帝国主義の再来とも考えられるのではないだろうか。



4. Joys Cyiza “How Globalization Affects Technology and Society”



グローバリゼーションにより、日常生活に急速かつ大きな変化が起こる。例えば、社会的な側面で見ると農村部から都市への移住が増加したり、遠く離れた人々とのコミュニケーションを可能にしたりする。さらに、途上国では新たな仕事や産業が増えるというメリットもあるが、一方で先進国の支配下のような存在になってしまう危険性もある。

またグローバリゼーションは、知識やアイデアの世界的な普及を可能にするが、これはテクノロジーの面においてもいえることである。

5. Alia Teto “Education and Glibalization”

ルワンダの教育は進化している。この団体のように、ルワンダの学生は海外の学生とオンラインでつながることもできる。これは、ルワンダの教育に対するグローバリゼーションの大きな影響であり、海外での学術的、専門的なインターンシップも行われている。また、かつて女性は社会的に少数派で、家事などの活動が授業に先行していた。しかし現在では、女性はクラスに出ることが許され、男子と同等の権利を持っている。したがって、ルワンダ人学生はみな社会に変化をもたらす大きな可能性を持っているといえるだろう。



◎本会議総括

コロナ禍を経て、2019年以来実に3年ぶりとなった第19回本会議は、ルワンダ国立大学フイエキャンパスでの開催となりました。今回の本会議では、「グローバリゼーションの現状と功罪及びその未来を考える」という全体テーマを掲げ、各メンバーが多様な側面からグローバリゼーションに関連したプレゼンテーションを行いました。その結果、ディスカッションも非常に真剣かつ建設的なものとなりました。

渡航前、本会議のテーマを決定した段階では、グローバリゼーションはルワンダに好影響を与えているものだという考えを私は無意識的に持っていました。それは、輸出向けのコーヒーで高い品質を誇っているほか、政府主導で「ICT立国」を掲げ世界的に注目を集めるルワンダにとって、モノやヒトがグローバルに移動する状況は非常に好ましいだろうと考えていたからです。

しかしその考えは、本会議を通して見事に覆されました。プレゼン後のディスカッションでは、主に「どのようにグローバリゼーションを先導していくか」「どのように自国の経済を維持するか」「どのように自国の文化を保護するか」という3つのテーマについて討論をしましたが、これを通してルワンダ人学生がグローバリゼーションに少なからず危機感を感じていることを痛感しました。グローバル化の進行と同時に優秀な頭脳が世界に流出してしまうこと、ルワンダは小国であるがゆえに国内産業が成長しづらいこと、またグローバル化によって欧米諸国の力が再び増してしまうのではないかと。グローバリゼーションの中にある現在のルワンダのそうした懸念点を真摯に捉え考えようとする彼らの姿からは、何か強い熱量のようなものを感じました。

グローバリゼーション最盛期の現在、世界における日本の存在感は徐々に減ってきていると言われていきます。その一方で、日本の未来を担う若年世代は、日本のあるべき姿や日本の未来について日ごろ真剣に考えることがあるでしょうか。自国の未来を真剣に考え、望ましい発展を導くべく議論するルワンダ人メンバーを見ていると、日本人の一若者としての至らなさを感じ、彼らの姿勢を私たちが学ばなければならないと心から痛感しました。

今後も今回の本会議のように、ディスカッションを通して相手国について知り、さらに自国についてもあらためて考え直すことにより「相互理解」が一層深まる、そんな充実した本会議を脈々と受け継いでいくべく、日々の活動に取り組んで参りたいと思います。

2022年11月

内 凜太郎（京都大学4年）

第3章 各活動報告

キガリ虐殺記念館
キミロンコマーケット
ムスリム人地区
ムランビ虐殺記念館
ファイエ・マウンテンコーヒー
ルワンダ大学ファイエキャンパス
在ルワンダ日本大使公邸
JICAルワンダ事務所
キガリ市内の公立小学校
Rwanda Clothing
カーネギーメロン大学アフリカ校
ウムガンダ
カントハウスミュージアム
キリスト教教会
アカゲラ国立公園

キガリ虐殺記念館 (Kigali Genocide Memorial)

ルワンダにおける主要な6つの虐殺記念館のうちのひとつです。キガリ虐殺記念館は2004年に設立され、ツチ族に対するジェノサイドによる25万人以上の犠牲者が眠る場所でもあります。ここでは、植民地となる前からジェノサイドに至るまでのルワンダの歴史や、ツチに対するジェノサイドが形成され実行されていった過程が写真や被害者の遺品・遺骨とともに展示されていました。ともに行動したルワンダ人メンバーがガイドのように説明しながら案内してくれたため、より深く理解することができました。それと同時に、ルワンダ人メンバー達が過去に真摯に向き合っている様子がうかがえました。個人的に一番衝撃的だったのは、1994年に子どもの約70%が家族の死を経験し、90%が誰かが殺されるのを目撃したといった調査結果です。子ども達の多くに深い心の傷を負わせたジェノサイドが二度と起こることのないように全世界で努力していかねばならないと改めて感じました。



キミロンコマーケット (Kimironko Market)

キガリ市内最大級のローカルマーケットです。野菜や川魚をはじめとする生鮮食品、掃除用具やバケツなどの日用雑貨、イミゴングやキーホルダーといったお土産など様々なものを販売しています。アフリカ布の生地を選び、オーダーメイドの服を作成してもらうことも加納です。生鮮食品のほとんどは国内で生産されており、一部は隣国のウガンダやタンザニアから輸入しているとのことでした。観光客だけではなく、地元の人も多く利用すると言われており、ルワンダ人メンバーの中にも洋服を買うために頻繁に行くといっている人がいました。お土産品の区画では、値段は決まっているのではなく、交渉して決めるというスタイルでした。日本語で話しかけられることが多かったので、日本人が多く訪れる場所なのではないかと思えます。キミロンコマーケットにおいてもキャッシュレス決済(MTN Momo pay)が利用可能であるという看板を見ることができました。



ムスリム人地区 (Kigali Muslim Quarter)

ルワンダ国民はその大半がキリスト教を信仰していますが、イスラーム教徒も一定数おり、その割合は国民の4.5%ほどといわれています。そのムスリムの人々の多くが、キガリに位置するムスリムクォーターで暮らしています。

ムスリムクォーターでは、Masjid Al-Fat'hというモスクを訪問しました。モスクの方のご厚意で、モスク内の見学およびルワンダにおけるイスラーム教やイスラーム教全般についての説明をいただきました。ルワンダ政府は宗教の自由を尊重しており、イスラーム教の休日はムスリムでない人も休日となるそうです。また、モスクの裏側ではムスリムの子どもたちがアラビア語の授業などを受けており、ルワンダにもイスラーム教がしっかりと根付いていることを実感しました。



ムランビ虐殺記念館 (Murambi Genocide Memorial Centre)



ルワンダにおける主要な6つの虐殺記念館のうちのひとつです。ムランビ虐殺記念館において特徴的なのは、遺体が目の前に安置されているという点です。ケースに保管され、死因や死亡時の年齢などが

書かれた遺体もありましたが、ほとんどの遺体は机の上に並べられていただけで、当時の凄惨さが伺えました。

建物は小高い丘の上であり、当日は学校として子どもたちが通っていたそうです。ジェノサイドが始まると、周辺の村人や生徒は校舎に逃げ込み隠れていました。しかしある時、電気や水の供給が止まり、多くの人々が飢えや渇きに苦しむ中、さらに、学校周辺にいたフランス軍が姿を消し、学校は過激派集団に襲われました。

遺体の大きさから、乳幼児や児童ほどの年齢の子どもたちもあり、これほど大量の死に向き合ったことはありませんでした。視覚、嗅覚で当時の凄惨さを追体験できるため、このような歴史を繰り返さないことを強く意識付ける、非常にインパクトのある展示でした。

ファイエ・マウンテンコーヒー (Huye Mountain Coffee)



ファイエ・マウンテンコーヒーは、ルワンダの代表的なコーヒー生産地であるファイエに立地しています。2500の農家が年間942トンのコーヒーを生産しています。ここはルワンダにおけるスペシャルティコーヒー発祥の地でもあり、2011年にデイビット氏によってファイエ・マウンテンコーヒーというブランドが立ち上げられ、2012年に「Cap of Excellence」で2位入賞を獲得しました。「ルワムウェル」で生産された品種がとても有名で、日本のさまざまなコーヒー店でも輸入販売されています。アプリコットやマスカットを思わせる優しく上品な風味と明るい酸味、後口に持続する甘さが特徴です。浅煎りで焙煎することが多いようです。ファイエ・マウンテンコーヒーは品質にこだわり、質の高いコーヒーを作っています。

ルワンダ大学ファイエキャンパス (University of Rwanda Huye campus)

ルワンダ大学ファイエキャンパス (The University of Rwanda Huye Campus) は、ルワンダ大学の本部が位置するキャンパスで、キガリではなくルワンダ第二の都市であるファイエにあります。かつてはキガリにあったそうですが、地方創生の観点からファイエに移転したと聞いています。キガリからはバスで2時間ほどの場所です。

ここには8000人もの学生が通っています。そのため、キャンパスの周りには（日本に比べれば小規模ですが）学生街が広がり、地域経済を支えています。キャンパスの施設はとても綺麗で、外見だけで比べれば日本の国立大学以上私立大学以下といったところでしょうか。ルワンダ政府が高等教育に多く投資している様子がよくわかります。一方、教室は薄暗い場所も多く、内部を見ればその課題も感じられます。学費は年間約30万円くらいと聞きました。主にアフリカからルワンダ政府に支援を受ける国費留学生が来ているといます。30万なら日本人の留学もアリかもしれませんね。

印象的だったのは、日本の大学と同様に課外活動や学生自治が行われているということです。スポーツのクラブや日本ルワンダ学生会議のようなアカデミックの団体があるといいます。また学生自治に関して、教師と学生は対等な関係だそうです。このようにキャンパス内で多様な学生が協力して生活することで、多様性を理解する土壌が形成されているのかもしれません。

多くのルワンダ人大学生はパソコンやスマートフォンが支給され、奨学金も与えられます。しかし、この奨学金の額も大幅なインフレで決して十分ではなく、バイトのできないルワンダ人大学生は厳しい暮らしを余儀なくされているようでした。

在ルワンダ日本大使公邸

大使公邸では、越智友佳子参事官をはじめ大使館の皆様にご案内いただきました。はじめに、日本人メンバーは「日本をどう変えていきたいか。ルワンダでの学びがそれにどう役立つと考えているか」、またルワンダ人メンバーは「ルワンダをどう変えていきたいか。日本との関わりがそれにどう役立つと考えているか」についてそれぞれの意見を述べたのち、ルワンダに興味を持った理由や、話を聞いて疑問に思った点などについてディスカッションをしました。

議論を通して、お互いが両国をどのように捉えているのか、またその魅力や課題は何であるのかをあらためて理解することができました。特に、ルワンダ人は自国の未来を非常に前向きに捉えており、我々日本人もその姿勢を見習うと同時に、自国の未来について真剣に考えなければならないのだと痛感しました。



JICAルワンダ事務所



JICAルワンダ事務所ではルワンダの現状と課題、JICAが行っているプロジェクトについてのお話をいただきました。大きく印象に残っているのは「ルワンダはブランディングが上手」というお話です。ルワンダはハブ空港の建設やICTへの投資を通じて外貨を獲得するとともに、ブランディングを行っています。しかし、ブランディングの一環でもあるインフォーマルビジネスの禁止が貧困層の職を奪っています。ルワンダの経済成長率は年平均7%と経済発展が著しい一方で、富は分配されておらず貧富の差が広がっているのも現状です。ルワンダ現地にいらっしゃるJICA職員さんが考えるルワンダの姿は大変興味深く、勉強になりました。

小学校・中学校訪問



小学校ではルワンダの初等教育について校長先生のお話を伺ったり、授業を見学したりして知見を深めました。ルワンダの初等教育は6-6-3年制であり日本と共通する点がある一方で、小学校卒業時に国家試験があるなど相違点も見受けられました。また無料で給食を提供しており、貧困層も学校に行きやすい取り組みを行っていました。さらにオンライン教科書を普及したり、二人に一つずつパソコンを支給したりするなど（政府は一人に一つずつと主張していましたが）新しい取り組みも見受けられました。またディスカッションベースの教育を目指しており、欧米教育に近づけているのではないかという印象を受けました。実際に小学校に足を運ぶことで、日本では知り得ないルワンダの初等教育に触れることができました。

Rwanda Clothing

Rwanda Clothingは、ルワンダ人デザイナーJoselyne Umutoniwaseによって2012年に立ち上げられたブランドです。最新の流行とアフリカ布を取り入れたデザインで、Made in Rwandaをかかげています。洋服のほかにもアクセサリやバッグが販売されていました。店内は西洋風の白を基調としたつくりになっており、そこに色鮮やかな服がたくさん展示されている様子はとてもきれいでした。価格はルワンダの物価を考慮すると非常に高く、洋服は日本円で1万円程度のものがほとんどでした。現在はキガリ市内にのみ店舗がありますが、今後は世界各国への出店も目標としているようです。



Carnegie Mellon University Africa

カーネギーメロン大学アフリカ校（Carnegie Mellon University Africa）は、アメリカに本部があるカーネギーメロン大学のルワンダキャンパスです。キガリの郊外に位置し、高い利便性を持ちながら落ち着いた雰囲気のある場所にあります。ゲートを抜けるとそこはさながらヨーロッパの大学で、日本の私立大学並みの綺麗な設備が整えられています。昼寝用のハンモックやソファ付きのラウンジ、遠隔授業の受講スペースなどもありました。ここでは、主にヨーロッパ系の教授からアフリカ出身の学生が工学の修士課程を取得します。

大学ではスタートアップを行なっている人も研究しています。学生会議のOBのレアンドレさんもその一人。彼は使用済みのバッテリーを電波塔に再利用するベンチャーを立ち上げ、ルワンダ社会に貢献しようとしています。日本でインターンシップにも参加した彼は、日本で得た経験がとても役立っているといいます。

このアフリカとは思えない大学を誘致することで、ルワンダはアフリカ内の、また国際的なブランド力を向上させたい狙いがあると思われます。また、アフリカ人の交差点でありアメリカとの結節点であるこの大学から多様な意見や価値観が交わり、新たなイノベーションを起こそうという思いもあるでしょう。

ウムガンダ



ウムガンダとは、毎月最終週の土曜日に行う地域奉仕活動です。その活動内容は、道路の清掃活動や瓦礫撤去、駐車場作りなど多岐に渡ります。外国人の参加は禁止されておらず、私たちの参加についても地元住民の方々は快く受け入れてくれました。私たちが参加した地域では、瓦礫の山からブロックを運び出して駐車場を作りました。

日本において伝統文化から若年層が離脱しているように、ルワンダにおけるウムガンダでも類似の事象が起こっていました。しかし、私たちが参加した場所には若者が多く、エクササイズ感覚でやっていると言っている者もいました。

活動は3時間で終わり、その後は日本の組内のような形で集会を行いました。そこでは1人1本水が配られ、そのようなインセンティブが参加者を繋ぎ止めるとも言っていました。

カントハウスミュージアム

カントハウスミュージアム (Kandt House Museum) は、キガリにある国立博物館の一つです。大きな学校と隣接していることもあり、子どもたちが活きた知識をつけるために訪れるそう。中には（小さいのが一匹しかいませんが）ワニや（十匹もいませんが）ヘビなどが展示されている自然パートと、植民地以前のルワンダの文化歴史を学べる展示パートで構成されています。どんなに小規模でも生きた動物を見る機会があることは重要なのでしょう。

観光地として見た時に、ぜひおすすめしたいのは展示パートです。どのようにルワンダに西洋の文化が持ち込まれ、それがどう需要されたのか、とてもよく理解することができます。また、入館料はガイド料が含まれており、写真一枚一枚に対して細かく説明をいただけます。ルワンダがドイツの植民地政策を高く評価していて、ベルギーのものとは対極的であることがよくわかりました。ちなみに、カントはルワンダを探検し、のちにルワンダ地区を担当したドイツの行政官の名前です。そこからドイツに対する印象の良さが窺えます。中心部から歩いていける距離にあるこの博物館。時間に余裕がある際にはぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

教会(キリスト教)



ルワンダにおけるキリスト教徒の割合は非常に多く、人口の約9割にも及びます。ジェノサイド後、他の宗教に改宗した人もいますが、依然としてその信徒数は圧倒的な割合を占めます。通常、日曜日の午前中に礼拝やミサを行います。それらの雰囲気は日本のそれとは大きく異なり、参加者たちはリズムカルな雰囲気です。説教や聖歌を執り行っていました。日本の教会のミサが持つ厳かさとは異なっており、身体全てを神に預け委ねるといった思想が体现されていると感じました。

滞在していたホテル近くにある教会のミサに参加したのですが、キガリ内で最も古い教会の内の1つだそうで、ジェノサイドの現場にもなった場所だそうです。その教会では、日曜日の朝7:00から2部制で1回2時間程度のミサが行われており、それだけそこに通う信徒の数が多いいことを実感できました。ミサに使われる言語はケニヤルワンダ語だけでなく、フランス語、英語も用いて行われるそうです。

アカゲラ国立公園 (Akagera National Park)



ルワンダ東部に位置し、ルワンダで最も大きい国立公園のひとつ。アフリカゾウやキリン、ライオンやサイなど8000を超える野生動物のほか、500種を超える野生の鳥類も観察できるそう。さらに、公園

内には10個の湖があり、観光客も行くことができる（もっとも有名なのは、Lake Ihema と Lake Shakan i）。

アカゲラ国立公園は、ルワンダで最も人気のある国立公園の一つで、目玉の観光地となっています。広大な面積を誇る国立公園は外国人向けに整備され、中にはお洒落なカフェや土産屋などが存在します。値段も外国人向けの設定で、一人100米ドルとガイド代がかかります。

私たちはキガリから車をチャーターし、アカゲラに向かいました。朝4時にホテル前に集合し、7時くらいにエントランスに到着。抗原検査の結果を見せて入場が許可されました。説明を受けたのち、いざ出発。前評判は悪かったのですが、シマウマやキリン、バッファロー、ブンバなどが雄大にサバンナを横切るのを見ることができました。自然の中をたくましく暮らす動物たちを見られたのはとても貴重な経験でした。どうも午後になると動物は見られなくなるそうで、2時くらいにサファリツアーは終了。またキガリに引き返しました。

第4章 参加者の所感

日本人参加者
ルワンダ人参加者

渡航全体の所感

今回のルワンダ渡航は私にとって初めてのアフリカであり、コロナ禍により3年ぶりの海外渡航でもありました。これまで日本で、ルワンダに関する多くの勉強会や書籍に触れてきたつもりでしたが、現地での経験はそれまでのイメージとは大きく異なったものでした。渡航前のルワンダに対する最初のイメージは、多くの人がそうであるようにジェノサイドでした。そう遠くない過去に起こった惨劇から、日本人が学ぶべきことがたくさんあるといった想いで、これまでの活動に参加してまいりました。しかし、現地へ着くとその様な出来事があったことが信じられないほど都市部は発展しており、アフリカのうちの1国であることすらも忘れてしまいそうになるほどでした。一方で、都市部と農村部による格差は顕著に表れており、急激な発展により取り残された人々が社会問題として表出化している現実を感じました。今回の渡航テーマは「グローバリゼーションの現状と功罪及びその未来を考える」です。貧富の格差というのは現代社会ではほぼ世界中で問題となっていますが、ルワンダにおける経済格差はまさにグローバリゼーションによる功罪に含まれるのではないのでしょうか。私たちは、訪問させていただいた場所すべてでこのようなことを念頭にディスカッションをしてきました。以下からは印象的な訪問箇所について、それらの所感を述べていきたいと思えます。

ジェノサイドメモリアルでは、虐殺前後の歴史を現地人からの視点で視てきました。これまで日本で学んではきましたが、実際に現地へ足を運ぶとその惨劇がリアルに感じられ、数々の展示に大きく感情が揺さぶられました。日本でも、広島と長崎に原子爆弾が落とされ、多くの民間人が亡くなっているというところで近いものを感じます。しかし、それらの歴史を振り返ろうとしたとき、映像や被害者の衣服などは残っていますが、遺体が展示されていることはありません。しかし、ルワンダではいくつもの部屋に白骨化した遺体が無造作に並べられていました。部屋には独特なニオイが充満し、気分の良いものではありませんでした。しかし、視覚と嗅覚を使って体験することで記憶への定着率は高まり、過去に起こった出来事が簡単に風化することはないと感じました。展示をまわってジェノサイドの歴史を振り返り、死者を悼むだけでなく、同じことを繰り返さないために私たちが今何ができるか考えることが重要です。そのためにはまず、ジェノサイドに関する歴史的事実を知り、ルワンダについて正しく認知してもらうことが必要だと考えます。

大学のキャンパス訪問では、ルワンダサイドのメンバーにキャンパスを案内していただきながら、現地の学生生活について話を聞きました。ルワンダ大学が擁する学部はいわゆる理系の学部がメインで、文系の学部は1つしかないそうです。キャンパス内には「airtel」という大手の通信会社が出資して出来たバスケットボールコートや体育館があり、学外の人々からのルワンダ大学学生への大きな期待が伺えました。さらにルワンダ唯一の国立大学であるルワンダ大学が、理系の学部をメインに設置するということから、ルワンダは理系人材の育成に力を入れているということが分かります。日本においてもしばしば、文系学部不要説や理系至上主義といったことが話題になります。しかし、高等教育において文系を排除することは効果的だと言えるのでしょうか。私は、文系と理系というものは国家という車体の両輪であると考えます。しかし、文系の必要性というものは非常にわかりづらく、再現性も低いためないがしろにされがちです。しかし、革新的な技術が発明されたときにその使い道を決める倫理観があり、世界情勢を正しく把握でき、過去に起こった悲惨な出来事から学ぶことは文系的素養ではないでしょうか。このことから文系的な学びは必要であると言えます。

最後に、在学中にこのような素晴らしい機会を得られたのはひとえに皆様方のおかげです。改めて感謝申し上げます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

沼口 蓮（桜美林大学4年）

ルワンダ人所感

“Rwanda and Japan have a lot in common; recovery for 1994 Genocide against Tutsi (Rwanda) and recovery from world war II ruins (Japan). As the youth, we come together to learn from history of both countries, participate in global prosperity, and inspire hope.” ~J. Eric Niyitanga, Rwanda

“At Murambi Genocide memorial site we learned about the history of Rwanda, how the Genocide was planned and put into action and how it was stopped by FPR Inkotanyi. After that educative visit, we took lunch together as all JRYC members and went to UR's innovation hub where we held a plenary session which was about discussing on globalization. It was very fun and educative, we also got time to know each other very well.” ~Issa Nsabimana, Rwanda

“Globalization must not be seen as a cause to the loss of cultural identities. Everyone needs to understand his/ her culture. The culture grows” ~ Francois Regis, UR student 3.

“Lesson I picked during the plenary session: We young generation what we need is all about awareness and learn from other cultures, history this will create better transnational collaboration, spread of technology, innovation and embracing the diversity. “ ~Didier Dieudonne BYIRINGIRO, JRYC Member, UR, Forestry and nature conservation

“JRYC is a good learning experience, personal development, as well as international connection track. Through Globalization we get connected to each other by telecommunications and transportation that made the world as a village. I've Learnt the critical importance of interdependence and how every nation benefits from each other not merely meaning the physical presence and even physically feasible to travel. I liked the intercultural development and growth, economic development and opportunities accessibility Globally. To make it short the JRYC helps in knowledge and skills exchange. I like how it is well organized, fun and enjoyable, that's a good exchange to keep for sure. ” ~ Deo Byiringiro, Rwanda

第5章 個人研究レポート

キャッシュレス決済
マイクロファイナンス
高等教育
モノの流通
宗教

名前：小日向麻優	大学：東北大学	学部：工学部	学年：3
----------	---------	--------	------

探求したい自分の問い

ルワンダにおけるキャッシュレス化はどの分野までどの程度進んでいるか。

その問いを選んだ理由（問いと自分の関係性）

自分は工学部の学生であるゆえ、ルワンダと聞いて頻繁に想像されるものの中で、ICTというワードに一番興味がある。しかし、ICT立国とされるルワンダ内では、日常生活ではどの程度ICTが活用されているか、またどの程度国民がそのメリットを享受しているかが不明である。先日、弊団体ルワンダ人メンバーから、キャッシュレス決済にも種類があり、浸透してきているということを知ったので、キャッシュレス決済という視点からルワンダのICT活用・普及度合いを調べていきたい。

また、自分自身はしばらくの間キャッシュレス決済を利用してこなかった。理由としては、自分が所持している金額がわかりにくいこと、使いすぎてしまうのではないかとという懸念があげられる。しかし、複数人での飲食の際の割り前勘定で便利であることから最近利用を始めた。こうした自分自身の経験から、ルワンダ人がキャッシュレス決済について肯定的な意見を持っているのかも同時に調査したい。

その問いに関する先行研究（参考文献調べ）

- ・タクシー・バイクの支払いシステムは、当初2019年7月までのキャッシュレス化を目指していた。しかしながら、同年5月に延期され、2024年までを目標とすることに変更された。(1)
- ・公共バスにおいては“Tap&Go”と呼ばれるICカードが利用されている。(2)
- ・ルワンダ公共事業統制当局(RURA)は2020年5月、バイクタクシーの決済もキャッシュレス決済導入を発表。Yego Moto、Pascal Technology、Mara Groupなどルワンダのテクノロジー企業がキャッシュレス決済技術を導入している。(2)
- ・AC groupが提供するTap&Goはカードとアプリケーションの2つのタイプがある。アプリケーションではバスチケットをいつでも購入することができる。(3)
- ・同国大手通信会社であるAirtel Rwandaが2020年5月に、バイクタクシーのキャッシュレス決済導入に向けて新たなプラットフォームを発表。(4)
- ・ルワンダでの銀行口座及びモバイルマネー開設率は50%程度。各種ICT・デジタルサービスを利用するにはこれらは不可欠である。ケニア、南アフリカ等ではこれらが進んでおり、割合が最も高いモーリシャスでは90%となっている。JETROは、導入をさらに進めていくためには、インフラ整備に加え、国民IDシステム・フィンテック関係の整備・普及が必要であるとの見解を示している。(ルワンダでは指紋ベースの国民ID登録率99%) (5)
- ・店舗決済では、“Ecobank Pay”というものが利用できる。MasterpassまたはmVisaと呼ばれるモバイルアプリ上でQRコードを表示することで決済が可能である。(6)
- ・2021年3月におけるRURAの調査では、スマートフォン所有率は82.9%で、MTN Rwanda LtdとAirtel Rwanda Ltdがそのシェアの大半を占めている。(7)

【参考文献】

(1)在ルワンダ日本国大使館(2020年2月)「ルワンダ月報」<https://www.rw.emb-japan.go.jp/files/100021281.pdf> (閲覧日：2022年9月12日)

- (2)Rexvirt (2020年6月11日)「Pick-Up ! アフリカ ルワンダ、バイクタクシー業界のデジタル化！他ルワンダ生命保険に関する話題」 <https://www.pickup-africa.com/article-v-56/> (閲覧日：2022年9月12日)
- (3)AC Group 「Products Tap&Go」 https://www.acgroup.rw/?page_id=26 (閲覧日:2022年9月12日)
- (4)Rexvirt (2020年7月7日)「Pick-Up ! アフリカ ルワンダでのバイクタクシーによるメーターとキャッシュレス決済導入に関する続報」 <https://www.pickup-africa.com/article-v-78/> (閲覧日：2022年9月12日)
- (5)JETRO 川崎大祐(2021年3月)「アフリカにおけるICT概況」 https://www.jetro.go.jp/ext_images/biz/seminar/2021/d4d0769e5f781076/shiryo2.pdf (閲覧日:2022年9月12日)
- (6)Impress Watch 鈴木淳也 (2020年3月4日)「ルワンダとキャッシュレス。現金王国の独自の決済文化」 <https://www.watch.impress.co.jp/docs/series/suzukij/1237778.html> (閲覧日:2022年9月12日)
- (7)RURA(2021年3月)「ACTIVE MOBILE-CELLULAR TELEPHONE SUBSCRIPTIONS AS OF MARCH 2021」 https://rura.rw/fileadmin/Documents/ICT/statistics/Report_on_mobile_telephone_for_Telecom_Statistics_report_as_of_March_2021.pdf (閲覧日:2022年9月12日)

問いに対する仮設:

いわゆる交通系ICカードであるTap&Goは、チャージすれば利用できるカードタイプのももあるため、乗客のほとんど(90%以上)が利用していると予測する。

一方、バイクタクシーについては、キャッシュレス導入の発表はされているものの、新型コロナウイルスの影響により、複数回の延期があった。ゆえに、2022年の時点では、導入段階にあると推測する。

その他、スーパーやレストランで利用できるQRコード決済については、銀行口座の開設が必要なこと、その開設率から一部の人(20~30%)にしか利用されていないのではないか。

問いの実証方法:

- ・(インタビューの質問なども)年代・居住地・職業別に利用しているキャッシュレス決済を調査する。複数ある場合には最も利用するもの、利点を聞く。
- ・Kigali市内における店舗種類の導入しているキャッシュレス決済を調査する。
- ・利用していない場合は理由を聞く
- ・キャッシュレス決済に対してポジティブかネガティブか。懸念点や利点を聞く。

問いの実証結果:

弊団体ルワンダ人メンバー10人程度(20代・大学生・居住地は首都キガリまたはファイエ)に聞いたところ、全員がMTN Momo payを利用していた。また、Tap&Goを所持していた。その他には、クレジットカードによるQRコード決済やbprとよばれる銀行のキャッシュレス決済を利用している人もいた。大学生同士で、送金をしあうことにMomo payを利用している現場を複数回目にした。質問した学生に、他の人もキャッシュレス決済を使っているかを聞いたところ、ルワンダではみんなが使っているよといった返答を得た。

Momo payを利用するのに銀行口座は必要なく、電話番号との紐づけだけで使える。(スマートフォンでなくても、いわゆるガラケーでも使用可能らしい)特定の番号をキーパッドで入力し、店番号、支払金額を続けて入力することで、決済が完了する。登録するのを補助する人がMTN Momoと書か

れたパラソルとともに街中のあらゆるところにいた。

その他には、退職した70歳の男性も、Momo pay、Tap&Go、bprを利用しており、高年齢の人でも利用している人がいることがわかった。この男性の話によると、政府は公的サービスのキャッシュレス決済も進めており、公立病院ではキャッシュレス決済のみが利用されているらしい。(私立病院では、キャッシュレスのほか現金も使用できる) 遠くにいる人にも送金できるなど便利な点が多いことから、現金よりもキャッシュレス決済を好むといていた。

小学校教員を務める50代の女性、弊団体OBで起業家の男性、日本大使館の日本人職員、タクシードライバー、コーヒー農園のガイドもみなMomo payを使用していた。コーヒー農園のガイドからは、キャッシュレスであると、いくら使ったかわからなくなることもあるが、やはり便利であるため、そちらを多く利用するという意見を得た。大使館職員の方は、小銭が無い店で買い物するときに便利であるといっていた。私自身も、スーパーで買い物をするときに、「おつりが出せないから、クレジットカードで支払って」とレジの人に言われたことがあった。

スーパーマーケットをはじめ街中のあらゆるお店でMomo payが利用できることを示した看板があった。滞在したホテルやタクシーなどの交通機関、現地人が良く利用するローカルマーケット“Kimir onko market”でも利用可能であった。ルワンダ大学フイエキャンパスの食堂でも利用でき、Mpesaなど複数の種類が導入されていた。(スマホ故障により写真消失) アカゲラ国立公園の入園料の支払いは、キャッシュレス決済のみで、Momo payやクレジットカードが利用されていた。

送金に使っているところは見たが、実際に支払いに使っているところは目撃しなかった。

弊団体メンバーのルワンダ人大学生は、バスのチケットをオンラインで予約していた。

研究の考察

MTN momo payとTap&Goに関しては、質問した人全員が利用している結果となったことから、仮設の通り、少なくともキガリ・フイエ市内では広く普及しているといえる。これらは、銀行口座を必要としないため、口座開設率がそれほど高くないルワンダの特性に合っているため、普及したのだと考えられる。バイクタクシーに関しては、現金で支払っている場合を多く見たので、これも導入段階であると推察される。その他の決済システムに序列は無いように見受けられたが、複数の種類が存在することもまた、キャッシュレス決済の普及を示す証拠となる。

現状から考えるに、今後は交通機関においてもキャッシュレス決済の利用が広まると予測する。

研究を通じた感想

一般的に発展途上国と分類されるルワンダで、キャッシュレス決済が普及していることに驚いた。街中で、キャッシュレス決済OKの文字を目にすることも多く、導入店舗の割合は日本と同程度の印象を受けた。また、あるルワンダ人がキャッシュレスだとお金を使いすぎてしまうのが怖いという気持ちもわかるといていたが、そこは同じ感覚を持っていることがわかり、興味深かった。

しかし、私事ではあるが、渡航中にスマートフォンが故障し使用できなくなったので、やはり現金を所持することも大切だと思った。(なお、キャッシュレス決済は利用していなかった)

名前：山崎 優菜	大学：京都外国語大学	学部：国際貢献学部	学年：3
<p>探求したい自分の問い： ルワンダでマイクロファイナンスを用いて貧困問題を解決することは有効であるか。</p>			
<p>その問いを選んだ理由（問いと自分の関係性）： 私は将来アフリカの貧困問題解決に携わりたいと考えており、現在マイクロファイナンスに着目している。大学の研究テーマである、ルワンダにおいてマイクロファイナンスを用いて貧困解決を行うことは可能であるのか、有効であるのかという問いを深めたいと考えこの問いを選んだ。</p>			
<p>その問いに関する先行研究（参考文献調べ） ルワンダの52%が1日2.15ドル以下（PPP）で生活する（World Bank, 2017）。ジニ係数は43.7である（World Bank, 2016）。ルワンダの金融機関またはモバイルマネーサービスプロバイダーの口座所有（15歳以上の人口の割合）は50.02%（World Bank, 2017）。100人あたりの携帯電話契約数は82（World Bank, 2020）。 2006年にユヌス氏が、グラミン銀行を発足しマイクロファイナンスのサービスで貧困層を支援したことから、ノーベル平和賞を受賞した。貧困層に向けてのマイクロファイナンスは、貧困削減を実現する画期的なアイデアとして注目を浴びている。しかし国連などの多くの組織がマイクロファイナンスを支持する一方で、マイクロファイナンスは絶対的貧困から抜け出すことには期待されていた効果がない可能性が高まっていると主張する研究者も多く存在する。またUNOSAAは、グラミン銀行の組織マネジメントや人材育成、財政マネジメントについて批判的である。 ルワンダの預金受け入れマイクロファイナンス機関のローン口座数77,344（FRED, 2021）。</p>			
<p>問いに対する仮説： ルワンダにおいてマイクロファイナンスを用いて貧困解決を行うことは、有効ではない。</p>	<p>問いの実証方法： （インタビューの質問なども） ルワンダの金融機関はモバイルマネーへとシフトするか。銀行を利用しているか。農村部において預金文化はあるのか。インフォーマルセクターとして商売することは可能か。</p>	<p>問いの実証結果： ルワンダの金融機関はモバイルマネーへとシフトする。銀行口座所有率は比較的 low、都市部の富裕層が多く利用している。また金融サービス利用料金がかかってしまう。農村部においてマイクロファイナンス文化は存在し、村で積立をして自然災害などで被害があれば積立金で補うこともある。しかしインフォーマルセクターとしての商売が禁止されている。</p>	
<p>研究の考察 ルワンダにおいてマイクロファイナンスを用いて貧困解決を行うことは、有効ではないと考える。なぜなら、預金文化がないルワンダにモバイルマネーシフトが起こりつつあるからだ。マイクロファイナンスは基本的に金融機関で受けられるサービスであることから、貧困層に浸透しづらい可能性が高い。しかし、モバイルマネーとしてマイクロファイナンスのサービスが利用できるようになれば普及するかもしれないが、信用スコアの正確性が課題となるだろう。また貧困層がマイクロファイナンスのサービスを受けられても、インフォーマルセクターが禁止されているため、生計を立てる意図でのマイクロファイナンス利用は貧困層にとっては障壁が高いだろう。さらに職も少ないため、借りた分を返せず帰って借金が増額する可能性もある。</p>			

研究を通じた感想

ルワンダにおいてマイクロファイナンスが貧困解決に有効でないことがわかった。世界的に見ても、マイクロファイナンスは絶対的貧困から抜け出すことには期待されていた効果がない可能性が高まっている。しかし、マイクロファイナンスの概念自体は貧困解決につながると信じているので、新しい形を探求したい。

名前：吉野匠人	大学：東京大学大学院	総合文化研究科修士課程	学年：1年
---------	------------	-------------	-------

探求したい自分の問い：

- ルワンダの高等教育機関は、どのように所属学生（教育学的視点）・社会（社会学的視点）に貢献しているのだろうか

その問いを選んだ理由（問いと自分の関係性）：

- 私は明星大学の講義でTAをしているほか、英会話教室で文法の時間講師をしており、大学が所属学生にどのような影響を与えるのか、また与えるべきかについて考え続けてきた。
- 高等教育（大学）は、学生に対し、自らの「人間の安全保障」を強化できるような「エンパワメント」、またその可能性（「ケイパビリティ」）の拡充、幸福の獲得手段の提示、可能性を最大限活かせるような心理的成長などを実現すべきだと考えている。
- また、私は国立大学の大学院に所属しており、大学と社会が密接に関わっていることを実感している。
- 高等教育機関（大学）は社会の要求に応え、その厚生向上に寄与することが求められていると考えている。

その問いに関する先行研究（参考文献調べ）：

高等教育機関（主に大学）は、教育・研究・社会貢献の役割を持つ。これらはすべて社会を利するものであるが、教育は学生個人の厚生を上げるものでもある。高等教育によって個人は①（就職などの）機会・②（在学中の幸福感、将来の自己効力感を向上させる）経験・③（社会生活の中で活用できる）能力の獲得が可能であると考えられる。このように、高等教育機関は学生個人にとっても、その直接所属しない社会の構成員にとっても重要な存在である。

一方、発展途上国の高等教育機関は激しい質と財政の確保の課題を抱えている。ルワンダにおいても例外ではなく、例えばルワンダの大学教員の博士号保有率は15%にすぎない。

ルワンダは人材育成を国家戦略の中核に据えている。特にICTを用いた産業育成を目指している。この点は大学にも反映されている。実際、ルワンダ大学の6つの目的のうち2つ目にICTの内容が含まれる。

【途上国の高等教育・事例としてのルワンダ】

・吉田和浩（2005）「高等教育」（黒田一雄編『国際教育開発 理論と実践』）によると、「発展途上国の高等教育は、未成熟で、あるいは短期間に急速に発展し、**質と財政の確保といった問題**に直面している」（p.138）。

・吉田（2005）によれば、発展途上国の大学制度は西洋モデル（研究と教育の統合というフンボルトの思想を反映したベルリン大学が原型）をローカライズしたものがほとんどである。スペインの思想家オルテガなどがいうには、大学の役割は①教育、②研究、③社会貢献（オルテガは「社会との相互作用を重視」（p.123））。

→特に教育・研究・社会貢献によって社会は大学から恩恵を受ける。教育は同時に個人も利する。

・吉田（2005）はトロウの分類に言及している。トロウは一国の高等教育の発展段階を①エリート型（大卒が15%まで）、②マス型（大卒が50%まで）、③ユニバーサル・アクセス型（50%以上が大卒）

に分類している。

→ルワンダの高等教育はエリート型。

・吉田（2005: 126）によれば、「他の教育レベルにおけるのと同様に、途上国内における地域間、男女間、所得層間、民族間、あるいは年齢層間のアクセス格差は高等教育においても顕著である」。

→ルワンダの国内格差は比較的軽度。

・Republic of Rwanda Ministry of Education (MOE) (2017) “Education Sector Strategic Plan 2018/19 to 2023/24”によれば、国立大学では男子学生の方が多いが、私立大学はより柔軟な開講形態をとっており、女子学生の方が多くなっている。社会科学系が人気。

・MOE (2017)によれば、高等教育就学率の地域格差は大きく、キガリ州では8.5%の就学率が、他の州では0.9~2.1%に留まっているという。

・UNESCO① (<https://uis.unesco.org/en/country/rw>、(2022、9月2日取得)によれば、2019年におけるルワンダの各段階における純就学率は、入学前教育は22.8%、初等教育は92.3%、中等教育は35.8%、高等教育は6.2%。就学率における男女格差はほとんど見受けられない。

・吉田（2005）によれば、高等教育の質に関する課題として、学生の質（それまでの教育、入学試験など）、教授内容の質（教員・教授方法、設備）、成果の質（卒業生の就職難）、**社会貢献の質（社会のニーズにこたえられているのか）**、教育全体への貢献の質（教員養成、カリキュラム開発など）がある。

→ルワンダも例外ではない。

・成果の質不足→MOE (2017)によれば、高等教育機関は施設、研究能力、産業界やインターンシップ先との連携が不十分。

・教授内容の質不足→MOE (2017)によれば、およそ15%の教員のみが博士号を取得している。

・教授内容の質不足→MOE (2017)によれば、高等教育機関の教職員は、実践的な能力、言語能力、一般的な知識のレベルに欠けているという。

⇒調査しきれていない学生・社会貢献・教育全体への貢献の質を含め、現地で調査したい。

【高等教育の個人への影響という教育学的視点】

・大学における「経験的な深い学び」、「情緒的なサポート」は卒業後の幸福に貢献。

(https://berd.benesse.jp/feature/focus/13-learn_growth/activity1/ 2022/9/10取得*)

・社会に出て以降、「専門知識の活用」「社会との関わり方（認識基盤）の活用」「スキルの活用」「人間関係形成に関わる力の活用」ができています。（*同じ文献より）

⇒個人の成長につながる講義や環境がどれほど与えられているのか。

・高等教育の個人に対する貢献を考える際、①（就職などの）機会・②（在学中の幸福感、将来の自己効力感を向上させる）経験・③（社会生活の中で活用できる）能力の獲得がどれほど可能であるのかを軸に検討すればよいのではないかと。

【ルワンダの教育政策】

・UNESCO①によれば、2018年において、ルワンダの15歳以上の非識字人口は1,967,627人に及ぶ。

・高等教育に関する政府の方針に関して、高等教育に対する支出は、初等教育の半分程度である（M

OE, 2017)。

・ルワンダの教育省の基本理念 (MINEDUC, 2003)

- To educate a self-resilient citizen who is free from all kinds of discrimination, including gender-based discrimination, exclusion and favouritism.
- To contribute to the promotion of a culture of peace and to emphasise Rwandan values, particularly agaciro (self-dignity), kwigira (self-reliance) and ubumwe (unity), and the universal values of justice, peace, tolerance, respect for human rights, gender equality, solidarity and democracy.
- To dispense a holistic moral, intellectual, social, physical and professional education through the promotion of individual competencies and aptitudes in the service of national reconstruction and the sustainable development of the country.
- To promote science and technology with special attention to ICT and digital competencies.
- To develop in the Rwandese citizen autonomy of thought, patriotic spirit, a sense of civic pride, a love of work well done and global awareness.
- To transform the Rwandese population into human capital for development through acquisition of lifelong learning skill.
- To eliminate all the causes and obstacles which can lead to disparity in education be it by gender, disability, geographical or social group.

・ルワンダは、以下のようなVision Statementを掲げ、ICT教育を実践しようとしている (Republic of Rwanda Ministry of Education (2016) "ICT in Education Policy", p.4)。

The Vision for ICT in Education is: "To harness the innovative and cost-effective potential of world-class educational technology tools and resources, for knowledge creation and deepening, to push out the boundaries of education: improve quality, increase access, enhance diversity of learning methods and materials, include new categories of learners, foster both communication and collaboration skills, and build capacity of all those involved in providing education."

Thus, ICT in education will contribute to achieving the Ministry of Education mission "to transform the Rwandan citizen into skilled human capital for the socio-economic development of the country by ensuring equitable access to quality education focusing on combating illiteracy, promotion of science and technology, critical thinking, and positive values" (ESSP, 2013).

・より具体的に、戦略的ゴールを掲げている (MOE, 2016: 4)。

The overall goal of this ICT in Education policy is to further access, equity, quality and relevance, as the key principles underpinning Rwanda's ICT and education policies. (Omitted) This policy's strategic goal is to encourage programmes and projects that will maximize on the benefits of ICT **in providing universal access and quality education for all.** →普遍的で質の高い教育の実現が目標。

・MOE(2016)によれば、教育におけるICT政策においては、11の政策領域が存在する。

① フォーマル教育におけるICT：授業におけるICTの活用、遠隔教育の普及、マネジメントにお

ける活用など

- ② ノンフォーマル教育におけるICT：図書館・情報センターにおける活用、民間・コミュニティーベースの機関とのパートナーシップの拡充
- ③ アクセスと公正
- ④ インフラ整備：基礎インフラの整備、電力問題の解決、訓練された人材の供給
- ⑤ カリキュラム設計、実行、援助：ルワンダの独自カリキュラムの開発など
- ⑥ 研修・能力開発：職務に就く前の研修（Pre-service training）など
- ⑦ マネジメント、補助、持続可能性（政府サイド）
- ⑧ Open Distance and e-Learning（ODEL）
- ⑨ 複数セクターのパートナーシップ
- ⑩ 研究・開発
- ⑪ 監視と評価

【ルワンダ大学の個別事例】

・ルワンダ大学（UR）HPによれば、そのミッションは、” To support the development of Rwanda by discovering and advancing knowledge, committed to the highest standards of academic excellence , where students are prepared for lives of service, leadership and solutions.”であり、対個人ではなく対社会のニュアンスが強調されている。

・URの6つの目的のうち、2つ目に” Integrate IT-based resources from around the world.”が書かれており、IT教育を重視していることがわかる。

・URのHPによると：

- ルワンダ大学は合計 49,477 人卒業
- 非STEMの卒業生は 53%、STEM 分野の卒業生は 47%。36%が女性で、64%が男性です。
- 学部課程が 95% を占め、総入学者数の 84% がルワンダ政府によって財政的に支援
- 2014年の出版物の総数は2,096で、STEM プログラムからの出版物が74%を占める
- URスタッフの数は、効率化により2013 年の2,367人のスタッフから、2020年の1,952人に減少

【日本との比較教育政策の視点】

・日本の高等教育は、中等教育との接続が適切ではない。アメリカやドイツでは、中等教育と高等教育の間に位置する課程が存在する。日本は、初年次教育の拡充などで対応を試みる。（原圭寛（2022）「学校段階再考

——教育制度と教育課程に関する比較教育史的試論——」）

・日本は、一般政府総支出に占める教育のための支出の割合が、OECD諸国の中でも下位

改めて問いを再掲：

ルワンダの高等教育機関は、どのように所属学生（教育学的視点）・社会（社会学的視点）に貢献しているのだろうか

<p>問いに対する仮説：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ルワンダの高等教育機関は、国家のICT戦略の中心として機能し、ルワンダの経済成長を支えている。 ● ルワンダの高等教育機関はルワンダの中では権威があり、その重要性については多くの人々が認識している。 ● 【学生への貢献】ルワンダの高等教育は、個人に対して機会・経験・能力を与えているが、教育の質の不足から課題も多い。 ● 【学生の他者との交流】ルワンダの大学生は、大学生の間で、また学外の人々との間で多様な意見を交換し、豊かな価値観を醸成している。 	<p>問いの実証方法：</p> <p>(インタビューの質問なども)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学のICT教育について、大学でのICTの活用について、大学関係者に話を聞く。 ● 訪問先の人に、"Are you cooperating with universities or research center on this project?"と聞く。 ● 街中の人に、"Do you think university play a key role in Rwandan progress?"と聞く。 ● 学生に、"Can you take advantage of better chance of employment?"などと聞く。 ● 学生に、Extracurricular Activitiesなどについて質問する。
<p>問いの実証結果：</p> <p>①ルワンダ高等教育・教育政策について</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学では、課外（クラブ）活動も存在し、スポーツや映画、車の運転などがある（エマニュエル）。 ● ルワンダでは、教育とインフラに多額の投資を行い、急速にインフレが進んでいる（本会議）。 ● ルワンダでは頭脳流出が課題であり、そのことをルワンダ人大学生はとてもよく認識している。しかし、大学卒業後もルワンダでは豊かな生活を送れないため、それを正当化する大学生も見られた（本会議）。 ● ルワンダでは、大学生は一日40,000ルワンダフラン（約5000円）で生活せざるを得ない（エリック）。 ● ルワンダでは、むちを使った暴力的な教育は10年前に禁止された。（ルワンダ大学キャンパスツアー内） ● 実用性の高い理数科教育などを絶対視、文系教育は軽視。（カリオベさん） ● ルワンダは大学よりも職業訓練校（TIVET）に通う人が多い。（JICA） ● ひと昔前までは、いい大学に行って、いい企業に就職するのが理想のキャリアパスだったが、今はいい大学に行って起業に成功するのが理想とされている（JICA）。一方、レアンドレさんは、起業するルワンダ人は少数派でcrazyな人がすると言っていた。 ● 官職の課長以上は、政府からの任命制。拒否権はない。（JICA） <p>②ルワンダの大学の特徴（優れている点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 総括すると、ルワンダ大学Huyeキャンパスの特徴は、きれい・活力・ディスカッション。 ● 大学の講師は、毎年テストが課され、それに合格することで免許が更新される（エマニュエル）。 ● 授業の中で、必ずグループ学習の時間がある（エマニュエル）。 	

- ルワンダ大学は1962年にでき、歴史が深い。5つのCollegeと、12つのdepartmentに分かれている。生徒は8000人でうち女性は3000人。(ルワンダ大学キャンパスツアー)
- 大学では、自治組織が形成されるなど学生主体の運営がなされている。また、先生と学生の関係は対等であるという (エマニュエル)。
- ルワンダ大学の施設はとてもきれい。多額の投資がされている。(ルワンダ大学キャンパスツアー)
- ルワンダ大学で学習するには、1年間で2,000,000ルワンダフラン (約30万円) かかる (ルワンダ大学キャンパスツアー)。
- ルワンダ大学での授業では、プロジェクターが用いられる。(ルワンダ大学キャンパスツアー)
- ルワンダ大学の学生は、パソコンやスマートフォンが政府から支給される。(ルワンダ大学キャンパスツアー)
- 廊下から教室を覗くと、先生は大きな声ではきはき話していた。寝ている人は見当たらなかった。(ルワンダ大学キャンパスツアー)
- ミスルワンダになると、ルワンダ大学に無料で通うことができる (JICAルワンダ事務所)。

③ルワンダの大学の課題

- 卒業生の就職先が圧倒的に不足している。(エリック)
- 大学職員は収入が低すぎてモチベーションがない。(カリオペさん)
- ルワンダ大学は、統合を繰り返すすぎてマネジメントにトラブルがおきている。(カリオペさん)
- ルワンダの大学生は十分な奨学金をもらっていない (インフレに対応して増額されていない) (カリオペさん)

④ルワンダの大学と社会の関わり

- ルワンダは、外国からの留学生に奨学金を出し (Study in Rwanda Program)、ルワンダで学ぶことを推奨している。しかし、アジア人はほとんどいない。(本会議)
- Huyeキャンパス周辺は、ルワンダ大学の学生によって経済が回っている学生街が形成されている。
- カーネギーメロン大学では、ルワンダ国内の起業と連携し、ルワンダ国内向けのソリューションを作っている。
- ルワンダの大学は、国内の企業へのインターンシップを通じて社会と繋がりを持っている (カーネギーメロン大学)。
- カーネギーメロン大学では、学生が校内でアルバイトをしている。一方、一般的なルワンダの大学生はアルバイトができる環境にない。

*

- ・エマニュエル：；ルワンダ大学学生、医学部
- ・エリック：ルワンダ大学学生、医学部、ルワンダサイド代表
- ・カリオペさん：日本・ルワンダで医学系の職に就く。官職にも携わる。ルワンダサイドOB。

・レアンドレさん：ルワンダ大学で学士・カーネギーメロン大学で修士号取得。日本のパナソニックでインターン。ルワンダサイドOB。

研究の考察

ルワンダの高等教育機関は社会と接続することが求められ、経済成長のための人材育成場としての機能が求められている。そのため、理数科教育や職業訓練校などに偏重している印象である。一方で、社会の言論を多様化させ社会改革の源流となるような役割は大学に与えられていないと感じられる。このように、ルワンダの高等教育機関は経済成長の促進という機能が期待されていると考えられる。

一方で、ルワンダの大学では高度な設備が整えられ、アクティブラーニングを含んだ教育が実施されているほか、学生は奨学金をはじめPCやスマートフォン、課外活動の機会が与えられ、大学は学生のより高い生活水準や、優れた人格形成に寄与するといえる。

大学の社会に対する貢献としては、経済成長への貢献をはじめ、科学技術の知見の社会への還元や、インターンシップを通じた大学との連携、Huyeでは学生街を形成することによる地元への貢献などがあげられた。また、アフリカ諸国から留学生を受け入れることでアフリカ内でのプレゼンスを上げる役割も担っているといえる。

今後、このようなルワンダの高等教育機関がどのように「人間の安全保障」に寄与するのかを検討したい。

研究を通じた感想

- ・同じ目線に立って、同じ土地で暮らしてみることが彼らの気持ちや考えに寄り添うことができた。
- ・ルワンダの大学生が持っている視点は、私のものとは異なっており、より柔軟な思考を手に入れることができた。

名前：内 凜太郎	大学：京都大学	学部：文学部	学年：4年
<p>探求したい自分の問い：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グローバリゼーションの流れを受け発展を続けるルワンダ国家が受けている恩恵の好影響は、ルワンダ全土ではどの程度波及しているのか。 2. ルワンダにおけるモノの流通はどのようになっているのか。 			
<p>その問いを選んだ理由（問いと自分の関係性）：</p> <p>（実用的理由）…来年度から大学院で西アフリカにおける商業形態（モノ・カネの流れや、パトロン・クライアント関係）について研究をしたいと考えている。そうした個人的な背景がある中で、「アフリカの奇跡」と呼ばれるまでに発展著しいルワンダにおける流通形態を知ること（商品はどの国からやってきているのか、国内産業の状況はどのようになっているのかなど）、またグローバリゼーションによる発展がもたらす人々への恩恵について考察することは、来年度からの研究にも生きてくると考えられるから。</p> <p>（ルワンダ的理由）…ルワンダの経済発展はアフリカにおいても目を引くものがあり、世界から注目を集めるほどである。一方で、日本で暮らす我々はルワンダについて得られる情報が限られていることから、ルワンダについて興味・関心がある者であっても、ルワンダの様子を首都キガリの風景からしか把握できていないのではないかと感じている。ルワンダ政府は、「2050年までに高所得国となる」という目標の達成を目指しているが、それを実現させるためには、キガリ以外の諸都市でのある程度の発展も不可欠になってくるだろう。したがって、キガリ市内はもちろん、日本にはアクセスできないキガリ以外の諸都市での現状を参与観察することで、現時点で経済発展の影響がどの程度国家内で反映されているのかを考察したい。</p>			
<p>その問いに関する先行研究（参考文献調べ）</p> <p>（経済発展に関する先行研究）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ルワンダ政府は、2035年までに高中所得国、2050年までに高所得国となる目標を掲げており、2017年からは、年平均9.1%の経済成長を目標とした中期的成長戦略「第一次国家変革戦略（NST1）」を実施している。」 <p>（外務省HP ルワンダ基礎データより）</p> <p>⇒現在は、その経済成長の真ただ中にある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ルワンダは人口も天然資源も少ない小国である上、内戦で働き盛り世代の多くが犠牲になった。内戦後のルワンダ政府は、「無知が内戦を引き起こした」という反省から『知識基盤経済』の育成を 			

掲げ、国を挙げてICT産業に力を入れることを決めた。経験も資産も持たない若者が経済の主役になるしかない。そんな厳しい条件も、ICT化の流れを加速させた。」

(2018/12/14 「The Asahi Shimbun GLOBE+」 <https://globe.asahi.com/article/11994056> より)

⇒国内産業の成長の代替案としての「人材育成」という側面もあると考えられる。では、物質的な国内産業の状況はどのようになっているのだろうか。

(アフリカにおける商業・流通形態に関する先行研究)

・西アフリカにおける商業形態においては、「パトロン・クライアント関係」がしばしばみられる。例えば桐越(2018)は、ガーナ及びニジェールにおけるコーラ交易で、商人やコーラの集荷場のオーナーに雇われて働く若者である「ヤロ」について言及しており、品質が劣化しやすいコーラの交易で利益を得るためには、信頼を置くことのできるヤロを雇うことが商売成功の第一歩であると述べている。また、信頼を置けるかどうかは、ハウサ語で真実、誠実、信頼などを意味する「ガスキヤ」という概念に基づき判断されると述べている。

(桐越仁美、2018、「西アフリカにおける若者の商売展開—コーラ交易を通じた信用の形成と拡散」『アフリカレポート』56(0)、22-35 より)

・アフリカが今後持続可能な開発を進めていくためには、国内企業による製造業の発展が必要不可欠である。一方で、その競争力の強化と人材育成はどの国にとっても大きな課題となっている。

アフリカにおいて、製造業者は主にインフォーマルセクターとフォーマルセクターに分けられる。インフォーマルセクターは雇用機会の創出などの面において非常に重要な役割を果たしている一方、近年ルワンダでは政府によるインフォーマルセクター規制がかけられている。またフォーマルセクターは、賃金が低いなど雇用に魅力が乏しい場合、人材の育成や職業訓練が困難になってしまう。

(大野泉、山田肖子編、2021、『途上国の産業人材育成 SDGs時代の知識と技能』日本評論社 より)

⇒ルワンダにおける国内産業の状況について、正確に把握する必要がある。

問いに対する仮説：

1. 首都キガリにおいては、経済発展の影響を様々な観点から確認することができるだろうと考える。

(建築物、物価、海外資本の店舗etc.) 一方、郊外やキガリ以外の都市では、首都ほどではないが、発展の途上を観察できるのではないだろうか。

問いの実証方法：

(インタビューの質問なども)

1. 聞き取り

…マーケットでは、気になった商品についてどこから仕入れているのかを聞く。

⇒直接他国家から仕入れている場合や、卸売主・中間仲買人から仕入れている場合がある

<p>2. ルワンダにおいては、すでに中国資本のモノの流れは恒常化していると考えられる。それに加えて、近隣アフリカ諸国やアジア諸国からのモノの流通がみられるのではないだろうか。</p> <p>また、そうしたモノの流通の影響により、「ルワンダ国内産業」は苦境に立たされているのではないか。（国の発展には国内産業の進歩が必要不可欠であるため、その様子も観察したい。）</p>	<p>と考えられる。それらについて、できればさらに詳しく聞きたい。</p> <p>2. 参与観察</p> <p>…都市ごとの発展は、各都市の様子を観察することである程度把握できるだろうと考えている。それ以外に、発展の指標はインフラ整備や科学技術の普及などからも判断できる。各都市の様子や人々の様子を慎重に観察したい。</p> <p>3. 現地スーパーでの調査</p> <p>…現地のスーパーに並ぶ製品がどこから輸入されているものなのかを調査することにより、ルワンダの輸入先の傾向が明らかになると考えている。</p> <p>4. 地域比較</p> <p>…上記1.2を実施し、それらをもとに地域間の比較を行うことにより、ルワンダ国家全体の現状を包括的に把握・考察することができると考えられる。</p>
---	---

問いの実証結果：

(1. グローバリゼーションの流れを受け発展を続けるルワンダ国家が受けている恩恵の好影響は、ルワンダ全土ではどの程度波及しているのか。)

① 首都キガリ

⇒経済発展の影響が、各所において見られた。ここにその例を挙げる。

・物価の上昇…キガリ市内においては、様々な場所で物価の上昇を体感した。例えば、現地スーパー（シンバスーパーマーケット）では、チョコレートが2500フラン（340円）で売られていたり、シャンプー類が約8000フラン（1100円）で売られていたりしていた。さらに、飲食店においても、日本で食事をするのとさほど変わらない価格帯の場所が多く見られた。これらが富裕層や外国人向けの店で

あることは否めないが、それを考慮しても物価の上昇はハイペースで進行しているといっただろう。

・さらなる高層ビルディングやマンションの建設…宿泊していたホテルのすぐ近くや、タクシーに乗っている際の車窓から、建設中の高層マンションや高層複合施設の広告および建設現場がみられた。これまでも、キガリコンベンションセンターやキガリシティタワーなど、海外資本による美しい建築は建設されてきたが、その動きは今後さらに加速していくと考えられる。

・インフラの整備…キガリ市内はもちろん、ルワンダ国内の幹線道路はほぼすべてコンクリートで整備されているという（JICA）。また、街の景観を整備するために、ルワンダではインフォーマルセクターに制限をかけ、それらをフォーマル化させようとしているという。さらに、滞在中は断水および停電もなく、生活インフラもかなり整ってきている印象を受けた。

一方で、少し幹線道路を外れると道路が未舗装であったり、農業を営んでいる人々がいたり、キガリに滞在中は物乞いや金銭をせがむ母子に声をかけられたりと、必ずしも市民全員に経済発展の恩恵が普及しているとは言えない状況であることは確かである。

② ファイエ

⇒ファイエはルワンダ第二の都市であるが、そのファイエに位置するルワンダ大学周辺は、大学街ということもあり景観も整備され、政府が投資しているということが明らかであった。一方、我々が訪問した「Huye Coffee Mountain」の周辺の農村では、道路は未舗装であり、キガリのような発展した姿はなかった。以下に観察した内容を挙げる。

・ルワンダ大学ファイエキャンパス…敷地内には様々な建物、スポーツ用のコートおよびグラウンドなどがあり、理系の学部には顕微鏡も多数整備されていた。また体育館のバスケットゴールには、ルワンダの携帯キャリア「Airtel」のロゴがプリントされており、政府および企業がルワンダ唯一の国立大学であるルワンダ大学にかける期待が感じられた。

また、もともとキガリにしかなかったキャンパスを、まだ発展途上であったファイエに移転したのは政府であり、ルワンダ大学の学生もファイエは大学街として発展したと話していた。キガリだけでなく、他都市にも経済発展の効果を普及させようとする政府の試みがここから垣間見えた。

・「Huye Coffee Mountain」の周辺の農村…幹線道路を外れ農村に入っていくと、そこには道路が未舗装なままで、原始的な農業を営む人々の姿があった。私が観察した限りでは農村でスマートフォン

を使用している人は見当たらず、また住居も土壁のようなものでできたものが大半であった。電気やガスが通っているかは外からは確認できなかったが、全住居に通っているようには見えなかった。

Huye Mountain Coffeeのガイドに話を聞いたところ、周辺の農村に暮らす人々は親戚が多く、また若い人は都市に出稼ぎに行き、一定の金額を稼ぐと農村に戻るとい生活をしているという。

さらに、道を歩いていた子供に話を聞いたところ、着ている服は買ったものではなく、作ったものであると話していた。キガリとは異なり、服は汚れていたり、古い状態であったりした。第二の都市とはいえ、キガリや中心部とは受けている経済発展の恩恵にかなり差があるように感じた。

(2. ルワンダにおけるモノの流通はどのようになっているのか。)

① ルワンダにおける海外製品の流通について

⇒海外製品の流通については、主にキミロンコマーケットおよびキガリ市内のシンバスーパーマーケットにて調査を実施した。なお、地方のマーケットおよびスーパーマーケットでは時間やスケジュールの都合上調査を実施することができなかった。

以下に調査結果を詳述する。

・キミロンコマーケット…マーケットでは主に野菜の輸入元について聞き取りを行った。マーケットには多種多様な野菜が並んでいたが、そのほとんどはアフリカ産（ウガンダ、タンザニア）であった。また、葉物の野菜はルワンダでも多く生産しているという。

・シンバスーパーマーケット…ここでは、主に既製品（お菓子や飲料、日用品など）の輸入元について、個人調査を行った。いかにその結果を記載する（国名：輸入元／数字：製品数）

◎飲料

ケニア 19 ルワンダ 12 タンザニア 4 マレーシア 1（ジュースはケニア産が多数）

◎洗剤・スポンジ類

エジプト 9 ケニア 6 UAE 6(スポンジ多数) トルコ 4 ベルギー 4 マレーシア 4 中国 1
ギリシャ 1

◎石鹸

エジプト 15 ケニア 12 トルコ 9 ドイツ 8 サウジアラビア 7 マレーシア 3 インド 2 ルワンダ 1

UAE 1

◎歯ブラシ類

中国 10 南アフリカ 8 タイ 4 アイルランド 1 ベトナム 1

◎お菓子類

ケニア 21 ルワンダ 9 フランス 7 トルコ 3 UAE 3 スペイン 3 イタリア 3 インド 2
イギリス 1

※製品の多かった企業一覧

- ・ Belle France…フランスの企業

frozen food, groceries, fresh produce, cleaning and health が主な製品 (Belle France H P より)

- ・ boni…トルコで最も大きな企業の一つ (多様な製品をこの企業が生産していた)

- ・ gullon…スペインの製菓企業 (お菓子売り場で特によくみられた)

② ルワンダ国内産業の状況について

⇒ルワンダ政府は「メイドインルワンダ」を掲げ、ルワンダ国内産業の発展に力を入れている。ここでは、そのような状況にある中で、シンバスーパーマーケットにて実施したメイドインルワンダゾーンの商品についての調査結果や、観察およびルワンダ人の話から分かった国内産業の状況について以下に詳述する。

- ・ シンバスーパーマーケットのメイドインルワンダゾーン…以下の商品が陳列されていた。

ビール (ハイネケン・SKOL・AMSTEL)	JAMBOの紅茶	INYANGE (水・ミルク・ジュース5種・チョコレートミルク)	セサミシード数種	グラノーラ	ホワイトパウダー
ソイビーンズ	コーヒー	はちみつ	ハンドソープ	トイレットペーパー	

- ・ Rwanda Clothing…”Rwanda Clothing is a Fashion and Home-Decor Production and Boutique , in the heart of Kigali. Rwanda Clothing ltd started in 2012 by Joselyne Umutohiwase aiming to offer well tail

ored special pieces and customized clothing made in Rwanda by Rwandans.” (Rwanda Clothing HPより)

⇒ルワンダ人による、メイドインルワンダの洋服を製作しているが、価格帯は多くのルワンダ人にとって手の届かないものであるのは確かである。

・カリオペさん（ルワンダ側OB）の話…「ポール・カガメ大統領は以前までは公の場にスーツを着て登場していたが、最近はポロシャツの一部にキテンゲ（アフリカの伝統布）のデザインを織り込んだものを着て公の場に登場する」

⇒大統領が、率先してルワンダの伝統を衣服に取り入れ、「メイドインルワンダ」を推進している。

・ルワンダ産コーヒーの国内での流通…輸出が97%であり、国内に流通するのはわずか3%である。近年は、ルワンダ国内にもその流通量は増加しているという。

・確認できたルワンダ企業…INYANGE（飲料メーカー）／Rwandair（航空会社）／AQUASAN（貯水タンク製造販売）／石鹼メーカー（名称未確認）

研究の考察

（1. グローバリゼーションの流れを受け発展を続けるルワンダ国家が受けている恩恵の好影響は、ルワンダ全土ではどの程度波及しているのか。）

⇒首都キガリでは、様々な側面から経済発展の恩恵を体感することができた一方、農村部ではキガリとは全く異なる環境が今なお残っており、都市の発展とは程遠い様子であった。またキガリにおいても、いわば経済発展に取り残されたような人々を目にすることがあった。これらの状況から、現在のルワンダでは、「都市と農村の格差」および「都市における人々の格差」の二つの格差が進行しているのではないだろうか。前者は主に情報や物資、職業へのアクセスに起因するもの、また後者は都市における職業へのアクセスに起因するものであると考えられる。

ルワンダ政府は、そのブランディングの巧妙さもあり、目覚ましい経済発展を達成しているが、その陰に隠された人々が今なお苦しんでいるということを忘れてはならないだろう。エリックが「Globalizationは一種のWesternizationなのではないか」と話していたように、ルワンダが西洋を中心としたグローバリゼーションの流れに乗り、経済発展が進めば進むほど、恩恵を受ける人々とその波においていかれ苦しむ人々との格差は広がっていくことが予想される。経済発展自体は決して悪いことではないが、上位の者だけが恩恵を被るのではなく、下位の者から底上げすることのできる社会構造を経済発展と同時に構築していくべきではないのだろうか。

（2. ルワンダにおけるモノの流通はどのようになっているのか。）

⇒ルワンダにおけるモノの流通は、海外輸入品と国内生産品に分けられる。

① 海外輸入品…野菜から日用品まで、非常に多くの製品が海外からの輸入品であった。野菜は、ウガンダやタンザニアといった近隣アフリカ諸国から、また飲料や日用品は、ケニアや南アフリカといったアフリカ大陸の大国や、UAEやトルコ、エジプトといった中東諸国からの輸入が主であった。

ルワンダは海から遠く離れた内陸国であり、さらに面積が非常に小さいことから、国内生産には不向きであり、多くの製品をタンザニア・ダルエスサラーム港とケニア・モンバサ港からの輸入に頼っている。したがって、比較的近い中東諸国からの海路を経由した輸入と、アフリカ諸国からの陸路を経由した輸入が製品の多数を占めていると考えられる。

一方、歯ブラシ類を除き、スーパーマーケットで中国製の製品がほとんど見られなかったのが想定外であった。これは、中国は物理的距離が遠く、製品の輸入には中東諸国などと比較してコストが高くなってしまったため、中国資本が日用品などの製品レベルではなく、さらに規模の大きなインフラ整備や国家への投資に移行しているためであると考えられる。しかし、正確な事実を明らかにするためにはさらなる調査が必要である。

② 国内生産品…首都キガリのスーパーマーケットには、メイドインルワンダの製品を陳列したスペースが少しだけ設けられていたが、それ以外にはルワンダ産のものはほとんどみられなかった。また、Rwanda Clothingやルワンダ産コーヒーなど、「メイドインルワンダ」としてルワンダ国家が世界にその存在を売り出しているものは、基本的には外国人観光客や海外輸出向けの製品であり、当のルワンダ人が消費できる状況には現時点ではないと考えられる。

ルワンダではポール・カガメ大統領がルワンダの伝統意匠を衣服に取り入れて公の場に登場するなど、「メイドインルワンダ」を、国を挙げて推進している。しかし調査結果から、そうした意識がルワンダ国民全員に届いているとはいいがたく、ミクロな視点ではほとんどの人々が海外製品に頼った生活をしていることから、「メイドインルワンダ」政策もルワンダ政府のブランディングの一種だと言わざるを得ない。

しかし、今後ルワンダが国際競争の中でさらに発展していくためには、「国内産業の発展」は必要不可欠である。ICT人材の育成などの政策は、地理的に国内産業の発展が困難であったルワンダが「人材」に光を見出したという点では画期的な政策であるが、それだけでは国際競争で戦うには不十分であると考えられる。これからのルワンダの国内産業および国内企業の発展を注視したい。

研究を通じた感想

調査を通して最も強く感じたことは、実際に現地に足を運ばないと分からないことがたくさんあるということである。私は、ルワンダに渡航するまでは、ICT教育や経済発展などルワンダの輝かしい部分を情報そのままに受け止め、それらの様子を見ることを楽しみにしていた。しかし、実際には輝か

しい部分だけではなく、そこに隠された問題点も数多く残されているのだということが分かり、日本で得られる情報だけで物事を判断することの危うさを痛感した。

このことを大学4年生の段階で学ぶことができたのは、自身にとって研究面でも進路選択面でも非常に大きなことだったと考えている。この学びを常に心にとどめておきながら、来年度からの研究を進めたり、何が自分の取り組むべき社会課題なのかを熟考して自身の進路を決めたりしたい。

名前：沼口 蓮	大学：桜美林大学	学部：リベラルアーツ学群	学年：4
探求したい自分の問い： ルワンダ人の日常生活におけるキリスト教的価値観と日本のそれとの違い			
その問いを選んだ理由（問いと自分の関係性）： 私は小中高大とキリスト教主義の学校に通っており、恒常的に教会にも通っていたため、比較的日常生活においてキリスト教との接点が多かった。その中で、宗教が、信徒の生活ひいては人生そのものに及ぼす影響を知りたいということからこの問いを選んだ。ルワンダは世界的に見ても特異さを持った宗教国家だと言えるだろう。ジェノサイドという歴史と宗教(キリスト教)の関連性まで観察できることを願う。			
その問いに関する先行研究（参考文献調べ） 石原明子.ルワンダジェノサイド後のコミュニティでの 和解実践 - NGO リーチ・ルワンダの活動から. 熊本大学社会文化研究13 別刷.2015. p. 135-156.			
問いに対する仮説： 日本との大きな違いは、信仰そのものが文化として根付いており、神との関係もドライなものになっているのではないだろうか。そう考える理由は、やはりジェノサイドに起因する。彼らがかつて持っていたであろう、熱気を帯びた信仰心はジェノサイドによって意識改革を促されたのではないだろうか。特に、カトリック教会に対する不信感は根深く残っているだろう。私の仮説では、ジェノサイドによりルワンダにおける文化というのは分断されたものと考えられる。その中でも、分断されずに残った、外国から輸入された「キリスト教」は残された人々がすすがるものとして現在も在り続けているのではないだろうか。	問いの実証方法： 実際にミサに参加し、参加者の年齢層や参加度(主観的)を視る。参加者にインタビューをし、キリスト教に関する価値観や生活について質問する。可能であれば神父や教会関係者にインタビューをし、教会内部から見た信徒の様子や若年層のミサへの参加率を聞く。 質問①：教会の歴史について教えてください。 質問②：今日のルワンダは急速な発展を遂げていますが、教会内部や信徒の生活に何か変化はありますか。 質問③：ウムガンダへの若者の参加率が減少気味だと聞きましたが、ミサへの参加率はどうですか。 質問④：これからのルワンダのキリスト教はどう変化していくべきだと思いますか。	問いの実証結果： 質問①に対する回答：ルワンダにキリスト教を持ち込んだのはドイツ人で、国民の教育水準の底上げに寄与したのも教会による教育だった。 質問②に対する回答：コロナ禍ではオンラインでミサに参加していた。昔より物質的に豊かになったため、信仰の仕方が変化していることは確か。難しいのは、自分の欲に従うことと信仰心を固く持つことのバランス。 質問③に対する回答：確かに年々減少しているような感覚があるそうだが、農村部の方がキガリより全体のミサへの参加率が高い。 質問④に対する回答：ヨーロッパのようにさらに日常生活に溶け込んだものになるだろう。一方で、礼拝・ミサ参加者の年齢層は将来的にはさらに顕著に高齢者が多く見られるのではないだろうか。	
研究の考察 教会が及ぼす社会への影響は日本と比べて非常に大きいと感じた。教会に対する寄付の中から学校に通えない子どもたちの学費が賄われるという事案もある。目に見える直接的なインセンティブが、人々に還元されているからこそその信徒数の多さということも考えられる。日本においても、教会構成員の高齢化という問題はあるが、その要因の1つとして娯楽の多さが挙げられるだろう。インターネット、スマートフォンの普及に			

より、余暇の過ごし方に選択肢ができたため、若年層が離れていくのではないだろうか。それは農村部の方が都市部より多くの参加者がいるということで裏付けられるのではないだろうか。


研究を通じた感想

・急速な発展を遂げるルワンダにおいて、外国資本による消費社会化への誘惑は避けられない。そういった環境で生活していくことと信仰を続けることは両立し難いが、新しい信仰の形を確立すれば可能だと感じた。

・インタビューを行なった人々のうち、誰も教会や政府に対する不満は言っていなかったことが印象的であった。言論が厳しく統制されているためなのか、教会らの社会貢献が人々に効いているのかは定かではない。

第6章 協賛・後援

協賛（助成）

公益財団法人 双日国際交流財団 様  Sojitz Foundation

公益財団法人 三菱UFJ国際財団 様

後援・ご協力

在ルワンダ日本大使 今井雅啓 様

在ルワンダ日本大使館の皆様

アフリカ平和再建委員会 様

桃山学院大学国際センター講師 小峯茂嗣 先生

おわりに

コロナ禍にありながら、このようにルワンダで直接対面の交流ができたことは、心から奇跡だと思えます。対面形式で開催された本会議は、新型コロナウイルスが蔓延する前の2019年に開催して以降初となります。メンバー一同、コロナ禍を乗り越え遠く離れたアフリカのルワンダで再び強い友情を育み、有意義な議論を交わすことができたことをとても嬉しく思っています。これも様々な方のご支援ご協力を賜ることができたからに他ならず、感謝の想いが募るばかりです。

今回も、本会議（ディスカッション大会）をはじめ様々な訪問や交流を通して、多くのことを学ばせていただきました。

冒頭にも説明した通り、本会議は活動の中核であり、発足当初から続いている、理念である「相互理解」を最もよく体現するイベントです。本会議ではこれまで、時代の変化に応じて様々な議題について議論してきました。虐殺のこと、平和のこと、ICTのこと、そして今回はグローバル化がテーマでした。グローバル化について、ルワンダと日本がこのように比較的容易に移動できるようになったのは間違いなくその恩恵です。しかし、ルワンダ人にとってグローバル化は負の面がより強い諸刃の剣でした。アフリカ視点では、激化するグローバル競争によって自分たちが搾取されていると捉えることもできます。今回、ルワンダ人視点のそのような意見を数多く知ることができ、グローバル社会に生きる者としての責任を強く意識させられました。同時に、互いの違う立場を理解する重要性を強く実感しました。

そして、今回の渡航事業では本会議以外においても、ルワンダサイドのメンバーをはじめ、多くの現地人と交流しました。この交流を通して、ルワンダ人の生活を擬似体験できたのではないかと思います。ルワンダ人は、鳥の声で起き、バイクタクシーで移動し、経済成長に夢を膨らましつつも物価上昇に苦慮し、暗い夜は早めに就寝します。ルワンダサイドのメンバーと同じ生活スケジュールで行動することで、ルワンダ人が日々何を考え、感じているのか。想いを馳せることができました。国際人として必要な想像力を多分に養うことができたのではないのでしょうか。

学生時代に日本開催の本会議に参加した、ルワンダサイドのOBにもお会いしました。OBの方々は、ルワンダをより良い国にするために奔走されておられ、とても感銘を受けました。同時に、彼らの思考の中には常に「日本の視点」が入っており、柔軟で革新的な思考力の源になっていると語ってくれました。培った経験を原動力に変える姿勢は自分たちにも必要だと気付かされました。

改めて、このような有意義な2週間を送ることができたのは、多くの皆さまの支えがあったからに違いありません。活動を助成してくださった双日国際財団と三菱UFJ国際財団の皆さまには深く感謝申し上げます。また、顧問の小峯先生、日本サイドOBの古屋様など、様々な方のご支援を賜りました。皆さま、本当にありがとうございました。今後も有意義な活動ができますよう、精進してまいります。

吉野 匠人（東京大学大学院修士1年）